ISSN 1346-261X

国際子ども図書館の窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く！

第9号
2009.3

表紙デザイン：熊谷　博人氏

【国際子ども図書館の2008年】

講演会「チェコの児童書の歩みと研究の今」講師：マルチン・ライスネル博士　（７月12日）p.40

児童文学連続講座「日本の昔話」（11月10日、11日）p.16

国際子ども図書館100万人来館記念式典（10月９日）p.41

展示会図録『チェコへの扉－子どもの本の世界』p. 3

展示会「童画の世界－絵雑誌とその画家たち」小冊子　p. 9

【国際交流】から

デンマーク（p.20）

第31回 IBBY 世界大会

ドイツ（p.19）

ミュンヘン国際児童図書館

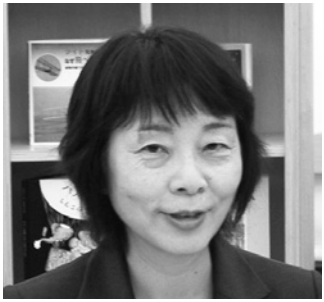
ミュンヘン国際児童図書館の子どもの貸出室

カナダ（p.22、23）

TDサマーリーディングのコーナー（ケベックの公共図書館）

児童室（ケベックの公共図書館）

は　じ　め　に



2008年10月９日は、国際子ども図書館にとって記念すべき日となりました。開館（2000年５月）以来の入館者総数が100万人を超えたのです。上野の森という立地のよさ、過去と現在が交叉する建物の魅力、そして何よりも子どもと本を愛する多くの人々に支えられてここまで来ました。国際子ども図書館ができる前、東京本館では児童書の閲覧もレファレンスも年間ごくわずかだったことを思うと隔世の感があります。

2008年は、更なる飛躍への道筋をつけた年でもありました。来年度予算政府原案で国際子ども図書館拡充整備のための設計費が計上されたのです。10月に開催された、子どもの未来を考える議員連盟と国際子ども図書館を考える全国連絡会主催の「国際子ども図書館の増築計画を考える・緊急フォーラム　夢をかたちに」も大きな力となりました。皆様のご支援、ご尽力に対し、改めて感謝の意を表したいと思います。

2005年の「ロシア児童文学の世界」展が田中かな子氏の旧蔵資料を核としたように、2008年の幕開けを飾った企画展示「チェコへの扉－子どもの本の世界－」は千野栄一氏旧蔵資料に多くを負っています。研究者が長年かけて蒐集した貴重なコレクションが散逸を免れて国際子ども図書館の蔵書となり、未来に確実に引き継がれていく、図書館員としてこれほど嬉しいことはありません。しかし、国際子ども図書館の書庫はあと２～３年で満架となります。貴重な文化遺産の現在及び将来の利用を保証するために、書庫の増設が不可欠です。

国際子ども図書館は児童書・児童文化の調査研究図書館であると同時に本のミュージアムでもあり、子どもと本のふれあいの場でもあります。これら三つの機能を旧帝国図書館の器に盛り込まねばならなかったため、業務運営上必要なスペースが不足し、サービス拡大の大きな障害となっています。世界経済の混乱や格差の拡大など先行きが不透明な時代ではありますが、こんな時代だからこそ、「世界をつなぎ、未来を拓く」ことのできる子どもの本が重要なのです。国際子ども図書館は、施設的な限界をできるだけ早く克服して、児童書のナショナルセンターとしてのサービスを更に充実していかねばなりません。増築計画に対するご理解とご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

2009年３月　　国立国会図書館国際子ども図書館長　齋藤　友紀子

国際子ども図書館の窓　第９号
＜目次＞

【口　絵】

【はじめに】　＝齋藤友紀子　1

【2008年のハイライト】

展示会「チェコへの扉－子どもの本の世界」
＝「チェコへの扉」展示班　3

「チェコへの扉」展によせて　＝村上　健太　5

2006年度国際アンデルセン賞・IBBY 受賞オナーリスト展
＝「IBBY オナーリスト2006」展示班　8

展示会「童画の世界－絵雑誌とその画家たち」
＝「童画の世界」展示班　9

平成20年度児童サービス連絡会－学校図書館への支援の実際と課題－
＝児童サービス課　12

児童文学連続講座－「日本の昔話」　＝企画協力課協力係　16

電子展示会「絵本ギャラリー」の新規コンテンツ
「アメリカの絵本　黄金期への幕開け」　＝企画協力課企画広報係　18

「子どもと本の内外情報」発信中　＝企画協力課協力係　18

【国際交流】

子どもと本をつなぐ人々との出会い
－ミュンヘン国際児童図書館＆第31回 IBBY 世界大会見聞記－
＝小沼　里子　19

出張報告：カナダの子ども読書推進活動とそれを支える組織
＝水戸部由美　22

コラム　世界の訪問者との出会いから　＝中野　怜奈　25

【調査・研究報告】

イランの児童図書　＝愛甲　恵子　26

ラテンアメリカ（スペイン語圏）の児童書　＝神戸　万知　31

コラム　童話のふるさと　＝宮川　健郎　36

【活動報告】　38

【数字で見る！国際子ども図書館】　47

【これから…】　53

【国際子ども図書館利用案内】　54

展示会「チェコへの扉ー子どもの本の世界」

１．はじめに

2008年１月26日(土)から９月７日(日)まで、３階「本のミュージアム」において、チェコの子どもの本を紹介する展示会を開催した。ヨーロッパの中央に位置するチェコは、絵本大国と言われるほど優れた作家、画家を輩出し、子どもの本に対する意識も高い。国際子ども図書館では千野栄一氏旧蔵資料を含め約850点のチェコの児童書を所蔵しており、このコレクションを中心に、国内他機関からの借用資料を含め263点を展示した。企画にあたっては、チェコ児童文学研究者、駐日チェコ共和国大使館翻訳官の村上健太氏に監修をお願いした。展示資料の写真と共に、あらすじや解説、作家紹介を盛り込んだ図録も好評であった。なお、展示リストを国際子ども図書館ホームページに掲載している。

展示会チラシ

２．展示構成

チェコの児童文学の歴史に沿った３部構成とし、原書だけでなく邦訳書も併せて展示した。また、ちひろ美術館から７点の原画を借用し、好評を博した。

■子どもの本の起こり～20世紀初頭まで

エルベンとニェムツォヴァーが編纂した昔話や伝説の紹介に始まり、版を重ね読み継がれているカラフィアートの『ほたるっこ』は、異なる画家による作品を複数並べ、挿絵の違いを楽しめるようにした。続けて、壮大な歴史物語や19世紀末の子どもの詩の黄金時代を代表する作家の詩集を集めた。

■第一共和国時代の子どもの本

文化・芸術が繁栄していたこの時代は、児童文学の分野においてもチャペック兄弟やラダ、セコラなどチェコを代表する作家・画家が活躍した。ラダのどこか懐かしいタッチの絵は、とぼけた味わいがあり来場者にも人気であった。このほか、社会主義的傾向のリアリズム作品や『長い長いお医者さんの話』のような新しいタイプの創作童話を紹介した。

■第二次世界大戦後の子どもの本

子どもの詩の第一人者と言われているフルビーンの詩集や、チェコ児童文学界の重鎮であったジーハの作品を展示した。また、1965年に放送を開始した「ヴェチェルニーチェク」というアニメーション番組から飛び出した作品や、1989年のビロー

ド革命以降の若い作家たちによる創意あふれる絵本を紹介した。1949年に設立された国立児童図書出版所（現アルバトロス社）から、多くの良質な児童書が出版されたことが、チェコの児童書の知名度を上げたと言える。

■特別コーナー

会場の四隅には、チャペック兄弟の幅広い仕事やクバシュタのしかけ絵本、日本でもおなじみの「もぐら」など、ユニークなテーマの展示ケースを八つ設けた。特に日本のカッパに似たチェコの水の精（vodník（ヴォドニーク））が登場する資料の紹介は、多くの人の興味を引いたようである。

カッパの操り人形

３．入場者数・アンケート結果

183日間の会期中58,957人（１日平均322人）の入場者があった。

大人用、子ども用と２種用意したアンケートには、それぞれ1,001名、214名、計1,215名から回答が寄せられた。展示の印象については、「チェコが身近に感じられるようになった」、「懐かしさを感じる」、「色彩の美しさ」等の感想が寄せられた。また、「親しんでいたキャラクターや作家が、改めてチェコのものであったと知った」との意見も多く、邦訳書を多く展示した効果と思われる。読んでみたい資料を選んでもらう問いでは、「全て」と記入される方もおり、特定の作品に集中することなく幅広い作品が選ばれる結果となった。

最後になるが、本展示が取り上げた作家の２作品の邦訳書が出版されるという、嬉しいニュースを耳にした。今後、チェコの児童書がさらに親しまれることを願ってやまない（会期中行った講演会とギャラリートークについては活動報告の39、40ページをご参照いただきたい）。

（「チェコへの扉」展示班）

←会場内案内看板の女の子（ヘレナ・ズマトリーコヴァー絵）

「チェコへの扉」展によせて

村上　健太

チェコの子どもの本

2006年、国際子ども図書館では、「北欧からのおくりもの」と題して、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、アイスランドなど北ヨーロッパの国々の児童書を展示し、その１年前には「ロシア児童文学の世界」の名の下、ロシアの子どもの本を紹介したことがある。今回の展示は、北欧より少し南、ロシアより少し西にある中央ヨーロッパの小さな国・チェコの子どもの本がテーマとなった。チェコの子どもの本は、イラストや、そこから派生するアニメを中心として、日本でも関心が高く、これまでにも度々展覧会の対象となってきたが、今回のように、子どもの本の歴史を軸に据えた展示は、あまり例がないものであったといえよう。

小さな国の高い文化

チェコは、日本人にとっては、地理的に隔たっていることもあって、比較的なじみの薄い国である。多くの国が入り乱れて存在している中央ヨーロッパの地図上で、チェコの位置を正確に指し示したり、チェコの公用語が何語であるかを即答できる人は、余り多くない。しかし、チェコには昔から高い水準の文化が息づいており、小国であるチェコ人の心の拠り所となっている。一番よく知られているのは音楽で、スメタナ、ドヴォジャーク、ヤナーチェク、マルチヌー等の作品の愛好者は我が国にも多く、演奏会のプログラムにもよく取り上げられる。その次によく知られているのは人形アニメーションで、トゥルンカなど往年の巨匠から独特な作風で知られるシュヴァンクマイエルまで、ファンは世界中に散らばっている。チェコほどに小さな国が、様々な分野で世界に誇れる文化を持っていることは、やはり特筆に価する事実であろう。

チェコの歴史と文化

チェコの歴史は古く、10世紀にはすでに自分たちの王朝を持っていた。しかし、ヨーロッパの中心に位置していることから、絶えず外国の圧力を受け、17世紀から20世紀初めまでは、オーストリア帝国の支配下で独立も失うことになった。そんな歴史の中でも、チェコ人はチェコ語を大切にし、優れた文化を生み出していった。ただ、その中で、日本に紹介されているのは、本国にある作品との割合からいえば、それほど多くない。先に例を挙げた音楽は例外として、文学の中から名前を挙げる

カレル橋（チェコ政府観光局提供）

とすれば、「ロボット」という言葉をつくったことで有名なチャペックや、フランスに亡命して活躍したクンデラなどは、かなりの作品が日本に紹介されている作家として名を挙げることができるが、その他はいまだマイナーな範疇に属しているのが現状である。子どものための本の翻訳もその例外ではなく、まだ訳されていない作品が、数多く存在する。

千野コレクション

私が、初めて国際子ども図書館と仕事をさせていただいたのは、今から７年前、図書館がチェコの児童書を購入する際に、その内容について相談を受けた時にさかのぼる。当時私は、その１年前にチェコの児童文学の歴史について博士論文をまとめたばかりで、この論文の副査の一人であった神宮輝夫先生のご紹介で、この仕事のお手伝いをさせていただいた。その後、著名な言語学者で、日本におけるチェコ研究の第一人者でもあった故千野栄一先生の蔵書の中から、600点を越える児童書を図書館が購入し、前に購入済みであった分と合わせて展示する計画が持ち上がった時に、再び声をかけていただいたのが、今回の展覧会の監修をお引き受けするに至った経緯である。

集書家としての千野先生については、展覧会の図録に保川亜矢子氏も書かれているが、千野先生が自ら書かれたエッセイからも、先生の本に対する計り知れない情熱をうかがい知ることができる。私自身も、チェコ留学時代、先生にあやかって、変転めまぐるしい革命後のプラハの町を、地図を片手に古本屋めぐりをしたことを、今も懐かしく思い出す。今では、インターネットを使えば、日本に居ながらにして簡単に目当ての本を見付けることができるが、ネットがそれほど普及していなかった当時は、足で歩き回るしか、良質の古書を手に入れる手段がなかったのである。

そして今回、この監修の仕事をしていく中で、千野先生の蔵書の多さと多彩さに、改めて目を見張ることとなった。しかも、通称「千野コレクション」として図書館に所蔵されている本は、蔵書全体のほんの一部に過ぎないというのだから驚きである。先生のご専門は言語学であったにもかかわらず、かくも多くの児童書を所蔵されていたということは、先生の児童書への情熱も並々ならぬものであったということを示している。このことは、先生がチェコの児童書の翻訳を多数出されているということからも分かる。

展示の方針について

今回の展覧会を監修するにあたって、ふだん見る機会の少ないチェコ語の原本をできるだけ多く展示するように注意したのはもちろんだが、せっかく蔵書数の日本一多い国立国会図書館の支部である国際子ども図書館で行なわれる展示なのだから、これまでに出た日本語訳もできる限り多く陳列したいと考えた。というのも、日本ではこれまで、英語やドイツ語を経由した重訳にしろチェコ語からの直訳にしろ、訳された本はあるのに、それが廃版あるいは品切れとなって、目にする機会がないものが多数あるからである。そうした、我々の先人の努力の結晶を書庫の隅に眠らせておくのはいかにももったいないので、展覧会の期間だけでも目に見える場所に置きたいと願った次第である。来館した方々の中には、チェコが世界に誇るイラストや、見慣れないチェコ語の文字の本の傍らで、こんな本が日本語に訳されていたのか、と認識を新たにされた人もいたのではないだろうか。そんな人が、図書館で訳本を取り寄せて、知られざる名作の世界に触れたことがあったならば、監修者として望外の喜びである。

今後の希望

考えてみれば、展覧会は終わったとはいえ、そこで展示された本のほとんどは国際子ども図書館、あるいは東京本館に収められている。そこで見付からない原書も、東京のチェコセンターに行けばいくらかは目にすることができる。借り出すことはできないが、その気になれば、チェコの子どもの本の代表的なものを、日本に居ながらにして閲覧することができるのである。願わくば、何十年か後に、更に充実したチェコの児童書の原本と、それに加えて新しく翻訳された作品の数々を合わせて、同じような企画が実現しないか、と胸算用をしてしまう。チェコでは、ビロード革命後の落ち着かない時代が終わり、新しい作品が出始めている。チェコ語ができる日本人の数も、昔よりはずっと多くなっているので、新しい訳が出る下地は出来つつある。気が早く、また身勝手な希望ではあるが、さらに充実した展覧会の実現を、心待ちにしている次第である。

（むらかみ　けんた　チェコ児童文学研究者、駐日チェコ共和国大使館翻訳官）

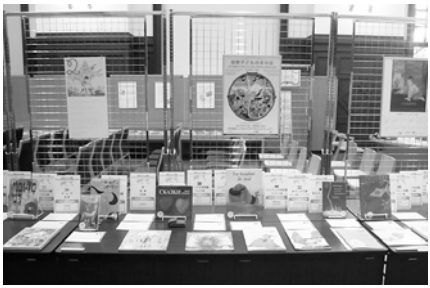
2006年度国際アンデルセン賞・IBBY 受賞オナーリスト展

2008年８月21日(木)から９月21日(日)まで、国際子ども図書館３階ホールにおいて、スイスに本部を置く国際児童図書評議会（以下、IBBY）の日本支部である社団法人日本国際児童図書評議会（以下、JBBY）と国際子ども図書館の共催で、世界各国の優れた児童書を紹介する展示会を開催した。

IBBY 展ポスター

国際アンデルセン賞は「小さなノーベル賞」とも呼ばれ、児童文学の分野で卓越した業績をあげた作家及び画家に贈られる賞である。IBBY オナーリスト（優良作品）賞は、IBBY の各国支部が自国で出版された児童書のうち外国の子どもたちに読んでもらいたいと選んだ本の作家、画家、翻訳家に贈られる。いずれも２年に１度開催される IBBY 世界大会で表彰される。

今回の展示会では、2006年度国際アンデルセン賞作家賞を受賞したニュージーランドのマーガレット・マーヒー（Margaret Mahy）と画家賞を受賞したドイツのヴォルフ・エァルブルッフ（Wolf Erlbruch）の邦訳書17冊と、世界57の国・地域から選ばれた IBBY オナーリスト受賞図書（原書166冊と邦訳書26冊）を文学、翻訳、絵本の順に展示した。絵本のそばには、推薦した国・地域の言語で「友達」と書いたボードを並べ、それぞれの国や地域についても紹介した。また、共催の JBBY の巡回展示資料を用いたことによって、直接資料を手に取っていただく展示会を実現することができた。会場内には、ゆっくりとご覧いただけるようベンチを配した。



各国の子どもや児童書にかかわる審査員が他国の子どもたちに読んでほしいと推薦した資料だけに、文字が読めなくても絵で内容が分かる個性豊かな資料がそろった。その本を直接手に取って読むことができるので、大人も子どもも時間を忘れた様子でページをめくる音だけがホール内に響いていた。

（「IBBY オナーリスト2006」展示班）

展示会「童画の世界－絵雑誌とその画家たち」

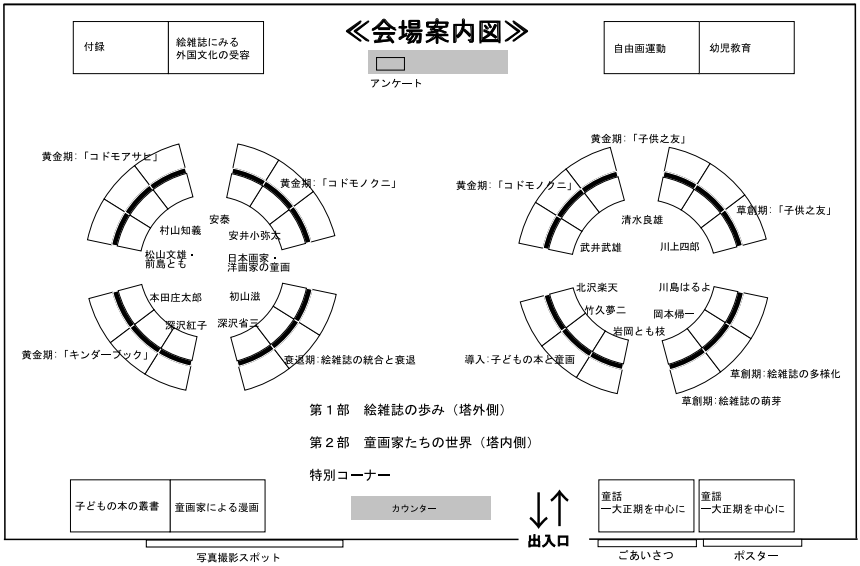
１．はじめに

国際子ども図書館では2008年９月20日(土)から2009年２月15日(日)まで、３階「本のミュージアム」において、当館で所蔵している絵雑誌を中心にした「童画の世界－絵雑誌とその画家たち」展を開催した。

100年前の日本で、どのページにも絵を掲載した多色刷りの児童雑誌が刊行された。この児童雑誌はやがて絵雑誌と呼ばれるようになり、戦争などの影響で衰退していくまで、子どもたちに大きな影響を与え続けることとなる。本展示会では、この絵雑誌に焦点をあて、そこで活躍し、自らの絵を「童画」と称した画家たちの作品など389点の資料を、途中で入替えを行って、展示した。

２．展示構成

展示は、「絵雑誌の歩み」、「童画家たちの世界」及び絵雑誌に関連した八つのテーマを取り上げた特別コーナーで構成した。



「絵雑誌の歩み」では、草創期・黄金期・衰退期の三つの時期に分け、明治後期の絵雑誌の萌芽から大正デモクラシーの自由な思潮と第一次世界大戦時の好景気を背景に発展したものの、満州事変の勃発と共に次第に衰退していく様子までを展示

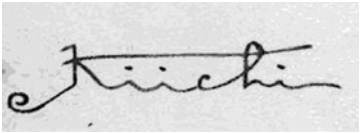
した。

文章の添え物としての挿絵という立場から、絵の独立性を高め、文字を知らない子どもたちでも絵を楽しみ、絵で学ぶ要素を模索し始めた草創期、そして、大正後期に至って迎えた黄金期では、思想的にも芸術的にも質の高い絵雑誌が登場する。ここでは、「子供之友」、「コドモノクニ」、「コドモアサヒ」、「キンダーブック」の代表的な４誌を取り上げた。しかし、昭和期に入り、満州事変をきっかけに戦局が進むにつれ、絵雑誌は内容・形態とも変貌していき、衰退していくこととなった。

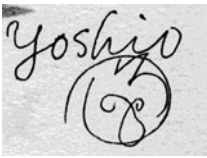
「童画家たちの世界」では、絵雑誌を舞台に芸術性の高い作品を生み出していった画家たちを20名取り上げ、その作品を紹介した。草創期を中心に童画の発展に寄与した北沢楽天、竹久夢二、その後、岡本帰一、清水良雄、武井武雄、初山滋などの黄金期にそれぞれの個性を競い合った童画家たちに加え、童画の分野以外での活躍が知られている東山魁夷（新吉）、古賀春江、恩地孝四郎の作品を展示した。パネルには、画家の経歴、肖像写真のみならず、画家たちが作品に描き添えたオリジナリティーあふれるサインも掲載した。また、ちひろ美術館、早稲田大学會津八一記念博物館、弥生美術館から計17点の原画を借用した。

初山滋「ハヘトリデー」
（「コドモノクニ」15巻11号（1936．9））

サインのさまざま



岡本帰一



清水良雄

竹久夢二

特別コーナーでは、絵雑誌のみならず大正期を中心に「赤い鳥」、「金の船」などの児童雑誌で発展した『童話』、『童謡』、音楽を「読む」（絵と歌詞）「聴く」（楽譜）「踊る」（舞踊）ことにより、総合的な教育を行うことを目指した『幼児教育』、従来の「お手本を模す」ことからの脱却を図り、子どもたちに自由な発想での絵を描かせることを標榜した『自由画教育』、外国文化が日本の生活に取り入れられていく様子を絵雑誌の中に見る『外国文化の受容』、いつの時代も楽しみな趣向を凝らした絵雑誌の『付録』、童画家たちが装丁・挿絵などをした『子どもたちの本の叢書』、そして、『童画家たちによる漫画』を取り上げた。いずれも当時の児童教育の動きを反映するトピックである。

３．関連催物

会期中、講演会、ギャラリートーク、音楽会を開催した。講演会は、９月27日に松居直氏による「松居直氏に聞く－絵雑誌・子ども・絵本」、10月26日に吉田新一氏による「戦中期『講談社の絵本』」を行い（活動報告の40、41ページ参照）、当館職員によるギャラリートークを12月14日と2009年２月１日に行った。

また、特別コーナーでも取り上げた大正期の童謡を中心にした音楽会を、１月18日に開催した。野口雨情、北原白秋、西条八十の詩と中山晋平、本居長世らの作曲により作られた作品は、「雨ふり」、「兎のダンス」、「七つの子」など今でも親しまれているものが多い。これらの歌い継がれてきた歌を子どもたちにも知ってもらい、美しい日本語に親しむきっかけとなってもらうことを目的に企画した。

音楽会の写真

４．終わりに

113日間の会期中42,984人（１日平均380人）の入場者があった。

アンケートに記入された意見を見ると、「この時代の、子どもによい物、何かを伝えたいという思いが伝わってきた」、「絵・詩のレベルがとても高く、今より情緒教育の質がよいように思う」など、当時の絵雑誌を高く評価する意見が多い。高齢層の来場者では、「心豊かなこの時代の絵を孫に見せたい。次回は孫を連れて来たい」という意見、若年層でも、「昔の絵だが、大変面白かった」という感想が見られ、世代を越えた共感を得ただけでなく、世代間の架け橋になったことに本展示会の意義を見出すことができる。

どの作品が印象に残ったかという設問では、羽仁もと子が独自の教育観に基づいて編集した「子供之友」に連載されたよい子・悪い子の行いを考えさせる「甲子上太郎（こうしじょうたろう）」のページや、絵雑誌の中で芸術的に最高峰を極めたといわれる「コドモノクニ」を挙げる来場者が多かった。個人の画家では、武井武雄、初山滋など、代表的な童画家に加えて、東山魁夷（新吉）や古賀春江が子どものためにすばらしい絵を描いていたとは知らず、大変よかったという意見が多く見られた。

一方で、展示の順序が分かりにくいという指摘もあったので、今後なお一層の工夫が必要かと感じている。

なお、今回の監修を務めていただいた岩崎真理子氏（日本児童教育専門学校副校長：当時）が、10月６日に急逝された。謹んでご冥福をお祈りすると共に深く感謝の意を表したい。

（「童画の世界」展示班）

平成20年度児童サービス連絡会
ー学校図書館への支援の実際と課題ー

国際子ども図書館では、平成19年度から「児童サービス連絡会」と題する児童サービス実務担当者間の連絡会議の場を設け、３年連続で三つのテーマで討議を行うこととしている。２年目にあたる平成20年度は、「学校図書館への支援の実際と課題」（協力貸出し、レファレンス、学校司書等への研修等）をテーマとして、2008年10月15日（水）に開催した。本年度の討議にも、児童サービス関連の活発な活動、並びに広域的かつ館種を越えた支援を行っている、昨年と同じ図書館９館に継続参加を依頼した。この会は、都道府県立図書館との連携・協力を強化するとともに、討議内容の公表をもって、参加館以外の都道府県立図書館の児童サービスに係る図書館活動を支援することも目指しており、昨年度の報告は本誌８号（2008年３月刊）及び当館ホームページに掲載している。
（http://www.kodomo.go.jp/event/evt/bnum/event2008-04.html）

前列左から：大阪府立中央図書館、群馬県立図書館、東京都立多摩図書館、山口県立山口図書館、福岡県立図書館、後列左から：岐阜県図書館、石川県立図書館、福島県立図書館、徳島県立図書館の参加者。後列右３名は国際子ども図書館職員。

会議は、国立国会図書館国際子ども図書館長からの開会あいさつの後、国際子ども図書館からの報告（「国際子ども図書館における学校図書館へのサービスについて」）を行い、今年度テーマに関して、参加館に対して実施した事前アンケートに基づく討議に入った。

各館の活動状況や課題などに関する意見交換のうち、主だったものを本誌でお伝えし、事前アンケートの結果は、前回同様当館ホームページに掲載予定である。なお、以下に記載する実施館の数は平成19年度の数値（当館を除く）である。

＜学校への団体貸出しについて＞
（実施館：セット貸出し３館、セット以外の貸出し７館）
・小中学校のための「セット文庫」（内容はホームページ参照）を作っている。学習支援用のセットは細かい希望に添えるように種類を多くして１セットあたりの

冊数を少なくしている。また、セットを活用するための参考となる大人用の「参考図書セット」を教員の意見も取り入れながら作っている。(岐阜)

・図書館未設置町村への配慮として各教育委員会に1,000冊を１年間預けるサービスをしている。学校ごとに分けて使ってもらっている。また、県内各校へ「朝の読書推進図書セット」、「総合学習支援図書セット」の貸出しも行っている。(群馬)

・調べ学習用の教科支援用図書と読書支援用図書をテーマごとのセットにして貸し出している。選書は今のところ図書館員が行っているが、県内６か所の教育事務所の方々との交流を生かし、協力を図っていきたい。また、福岡県図書館協会の相互貸借として、館種を超えた相互貸出を行っており、例えば高校が大学図書館から資料を借りることもできる。(福岡)

・平成20年度から、特別支援学校に「特別支援学校セット」を貸出し。その他は、要望のあったときにセットを組んで貸出しをしている。(福島)

・小中学校への貸出しの際、負担してもらっていた返却時の搬送費用を今年度から県立図書館の負担にしたところ、利用が増えた。(岐阜)

・近隣の学校には利用してもらえるが、遠い学校は物流が難しく団体貸出しがしにくい。(複数)

・熱心な担当者がいるかどうかで利用されるかどうかが決まってしまう。(複数)

＜学校を通じての児童・生徒へのサービスについて＞

―見学・調べ学習・おはなし会（実施館：見学９館）

・先生と事前の打ち合わせをして、中学生に調べ学習や図書館の利用法を体験してもらっている。現在申し込みがあるのは特定の中学校のみだが、来年からはもっと広めていきたい。(大阪)

・図書館の近隣の小学校を対象にモデル的に「来館おはなし会」を開催している。(福岡)

・敷地内に美術館もあり、２館一緒に見学する学校が多い。昨年は年間35回、1,520名受入れ。リピーター校も増えている。(福島)

―職場体験（実施館：９館）

・児童担当だけではなく、多摩図書館全体で中高生を受け入れる。体験期間中は１名チューターがつく。内容は毎年異なる。今年度は「おはなし会体験」を組み込んでみたが、少し定型化していきたい。特別支援学校などからの受入希望も増えていくと思われる。(東京)

・７～９月（夏休みを除く）の火～金の４日間、１回４～９名程度の中学生を受入れ。資料整備、窓口業務など図書館全体を体験してもらうほか、必ず「おすすめ本」の紹介カードを作成してもらっている（ファイルにて展示)。(福島)

・職場体験は、主に夏休み期間中に３、４名が３～５日体験する形で中高生対象に行っている。(石川)

―出張サービス（実施館：２館）

・特別支援学校からの要望を受け、出前のおはなし会をしている。手話による読み聞かせを行うこともある。（東京）

いずれのサービスも、県内全域にサービスするのが難しいが、子どもたちに市町村立図書館と都道府県立図書館の役割の違いを伝えるためにも実施していく必要がある。（複数）

＜学校（学校図書館）にかかわる大人へのサービスについて＞

―研修の実施（実施館：９館）

・平成16年度から実行委員会を設置し、県教育文化奨学財団の助成を受け、「ボランティア養成講座」、平成18年度から「学校読書ボランティア講演会」も行うようになった。ボランティアの交流会として「読書まつり」も行っている。（福岡）
・「群馬県図書館大会」（公共図書館、学校図書館、大学図書館で組織している群馬県図書館協会と県立図書館が主催）の分科会のテーマに学校図書館が取り上げられることが多い。平成19年度は「公共図書館と小中学校図書館の連携」、「高校と大学の利用者教育」、「学校図書館の読書案内」の３テーマで実施された。（群馬）
・平成14～18年度に行ったボランティア養成講座研修修了生が、県内各地や県立図書館の夏のストーリーテリングイベントで活躍している。将来的には、ボランティア養成講座の受講を修了した方々に向けて実践の場の提供と、その拡大を考えている。（石川）
・対象を学校司書等に特化させた実施がなかなかできないのが課題だ。（複数）

―講師派遣（実施館：５館）

・依頼があればどこへでも出掛けて相談に乗っている。学校からの依頼は夏休みに集中する。学校図書館の運営、アニマシオンについての希望が多い。（山口）
・「学校図書館支援出前講座」は県立図書館の講師派遣事業だが、館内に講師がいなければ適切な外部講師に依頼し、館の予算で派遣することもある。（群馬）

＜学校（学校図書館）への情報提供について＞

―情報発信・配布（お勧めブックリスト・調べ学習支援資料等）（実施館：８館）

・おすすめの定番本や新刊本のリストを作成して冊子やホームページで提供している。（複数）
・「小学校学習内容一覧表」を先生方と共同で作成。国語は単元ごとにお勧めタイトルまで紹介しているが、他の科目は学習時期と単元の内容紹介まで。公共図書館側は学習の時期が分かると資料提供の準備ができる。学校側は図書館に慣れていない先生の利用の助けになる。昨年度作成したため、まだ活用事例報告はない。（岐阜）

・物語・絵本への件名付与をしており、公共図書館でのテーマ展示に役立っているとの声がある。学校支援でも、テーマで検索するとそれに合う本が出てくる、という便利なシステムがほしい。(山口)
・館種を越えた連携協力（県立・公共・学校）で平成14年に「調べ学習・総合的な学習の時間に役立つ図書館～利用マニュアル～」を作った。総合的な調べ方マニュアルで、地元の図書館から国立国会図書館までどう使い分けるかも載っている。ホームページ公開もしている。県立図書館では改訂をしたいと考えているので、今後具体的な話を進めていきたい。(福岡)
・東京都子ども読書活動推進計画事業の一環として作成したブックリストのうち『扉をあけて』は中学校から、『羅針盤』は高校から「選書等に役立てている」という意見があった。(東京)
・平成19年度上半期に５回以上予約された「ベストリクエスト一覧」を県立高校へ向けてメール配信し、選書支援をしている。(徳島)

＜学校（学校図書館）へのサービスを行う上での課題、問題点、今後の取り組みについて＞
・高校の学校司書の地区会に出させてもらって意見交換している。生の声が聞けて役立つ。具体的なリクエストが出るし、研修会に参加してもらうきっかけになることも。多忙なヤングアダルトに向けて、学校図書館を通じて府立図書館の本を提供できれば、と考えている。(大阪)
・県の学校図書館評議会の総会や研修会に顔を出すようにし、県立図書館子ども読書支援センターを積極的に PR している。(山口)
・公共・大学・学校図書館で組織している岐阜県図書館協会で行っている年１回の大会において、今後は学校図書館がらみのテーマも扱いたい。また、館種を越えた交流の機会（研修会）を増やしていきたい。(岐阜)

＜まとめ＞
「子どもの読書活動の推進に関する法律」(2001年）の制定を受け、各地で子どもの読書活動推進計画の策定が進み、学校図書館支援に取り組む公共図書館が増えているが、今回、多様なサービスを実践している都道府県立図書館の実務者の参加を得て、学校図書館への支援の実情や問題点について有意義な意見交換ができた。今後の学校支援のあり方について考える一助となれば幸いである。なお、当館に対しては「学校図書館支援の先進事例の紹介」、「学校図書館セット貸出しの実際の使われ方や反響についての紹介」、「この連絡会のような情報交流の機会の充実」などの要望があった。寄せられた要望や各県立図書館の取り組みなどを参考に、今後のサービスの方向性を考えていきたい。

(児童サービス課)

児童文学連続講座ー「日本の昔話」

2008年11月10日(月)と11日(火)の２日間、国際子ども図書館において、第５回目の「国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座－国際子ども図書館所蔵資料を使って」を開催した。この講座は、当館が広く収集してきた内外の児童書及び関連書を活用し、全国の各種図書館等で児童サービスに従事する図書館員の資質向上と幅広い知識のかん養に役立てることを目的としている。全国23都府県の公共・学校・専門図書館等から61名、国立国会図書館東京本館職員を含む職員27名が参加した。

今年度は小澤俊夫氏（小澤昔ばなし研究所主宰）の監修により、総合テーマを「日本の昔話」として、日本の昔話に造詣の深い研究者と当館職員による講義を行った。また、受講者による意見交換等も行った。講義では、昔話の語り口とメッセージ、伝承のされ方、国内及びアジアでの伝播の仕方等を、昔話の実例を交えながら紹介した。また、講義で紹介された当館所蔵資料を受講者が手に取って閲覧できる時間を設けた。

小澤俊夫講師による講義

■講義内容

＜１日目（11月10日）＞

「昔話の語りの様式」

（小澤俊夫　小澤昔ばなし研究所主宰）

昔話は語られている時間の間だけ存在する時間的文芸で、その点で音楽と似ており、音楽と似たリズムを持つ。昔話は児童文学ではなく、簡単明瞭で荒っぽい。主人公も大道具も孤立的で、極端かつ図形的であるため、耳で聞いて「言葉を絵に変換する力」を養う。同じ場面を繰り返す時は同じ言葉で語るが、子どもが既知のものとまた出会うことは、未知に出会う不安を支え、魂の安定した成長のために大事である。大人が昔話を安易に改変して子どもの感受性をつぶしてはならない、等を、間（ま）を大事にした語り口で述べた。

「昔話からのメッセージ」（小澤俊夫）

昔話は、子どもが育つとはどういうことかという、過去から現在へのメッセージ。昔話は、個人が忘れたことを日本人全体の集合的な記憶として覚えており、核家族時代にこそ大事にすべきである。道徳よりも、「強く生きろ」というメッセージを重視する昔話は、劣った子に優しく、人生に対し肯定的。持っているものとちょうど合致しているものと会うと次の段階に進むことができ、成長には＜時＞があることを示している、と説いた。

「参考図書の紹介ー日本の昔話を知るためのブックリストー」
（石渡裕子　国際子ども図書館資料情報課長）

日本の昔話を知るための入門書、資料集、文献目録（辞書・事典、書誌、研究書）を紹介した。併せて日本の昔話に関するレファレンス・ツールとして、「レファレンス協同データベース」の利用方法も案内した。

＜２日目（11月11日）＞

「日本の昔話の展開」（大島建彦　東洋大学名誉教授）

お伽草子の「一寸法師」のように、ごく小さい姿であらわれて、思いがけない幸せをつかむという、いわゆる「小さ子」の事例を取りあげ、類似する昔話の分布と結び付けながら、その展開過程をたどった。

一寸法師、すねこたんぽこ、田螺（たにし）息子、蛙息子、蛞蝓（なめくじ）聟（むこ）等の「小さ子」の昔話は、青森から沖縄まで日本全国に分布しており、その出自及び行為により16種類に分類して講義を行った。

「昔話の伝承の実像」（武田正　山形短期大学名誉教授）

昔話が実際にどのような場所で伝承され、伝播したかを、東北地方の農家の構造、囲炉裏の配置と禁忌、語りの座としての囲炉裏端や木小屋（けごや）についての詳しい解説を交えながら具体的に紹介した。

「日本昔話のアジア的展望」（君島久子　国立民族学博物館名誉教授）

日本人に親しまれてきた、羽衣や花咲爺、さるかに、ねずみの嫁入り等、昔話の多くは、その源をたどれば、中国を中心に広くアジアに分布している。それらの昔話の分布と内容を、講師が現地調査に訪れた中国各地の風俗や民族衣装などをスライドで示しつつ概観した。

■意見交換会（11月10日）

受講者による意見交換会は、「受講内容をどのように生かし、所属機関や地域に伝えるか」をテーマとした。受講者からは、所属機関や地域の図書館に対して学習会や研究会で報告する、自ら研修講師となり伝える、一般利用者に対して広報誌で広報する、小展示に生かす、自分なりにまとめた講義ノートを子ども室に置く等の具体的な案が多く出された。

■講義録等について

2008年連続講座の講義録は2009年10月に刊行予定である。2008年の当日配布資料及び2007年連続講座の講義録「絵本の愉しみ（2）－アメリカ絵本の展開－」のPDF 版は、下記のとおり国際子ども図書館ホームページで公開している。

・当日配布資料　http://www.kodomo.go.jp/event/evt/bnum/event2008-08.html
・2007年講義録　http://www.kodomo.go.jp/event/text/bnum/text2007-01.html

（企画協力課協力係）

電子展示会「絵本ギャラリー」の新規コンテンツ
「アメリカの絵本　黄金期への幕開け」

国際子ども図書館では、2008年５月５日に電子展示会「絵本ギャラリー」（＊）に新たなコンテンツ「アメリカの絵本　黄金期への幕開け」を追加した。また、18世紀後半から19世紀の欧米の挿絵本を紹介する画像データベース「子どもの本　イメージの伝承」に、新たにトーマス・クレイン、エレン・ホートンの『海外で』やケイト・グリーナウェイの『四月の子どもの歌』など５作品を追加した。

＊「絵本ギャラリー」（http://www.kodomo.go.jp/gallery/）は、絵本の発祥から20世紀までの発展の流れを、内外の貴重な絵本の画像や音声によりインターネット上で紹介するコンテンツであり、現在７点のコンテンツを提供している。

「デンスローの三匹のくま」

アメリカの絵本　黄金期への幕開け

19世紀末から20世紀初頭にかけて子どもたちを夢中にさせた、西部開拓などのアメリカ独自のテーマを題材とした絵本や挿絵本、伝承詩を基にした絵本など11冊を紹介している。

（企画協力課企画広報係）

「子どもと本の内外情報」発信中

国際子ども図書館ホームページ「資料情報サービス」の一番下に「子どもと本の内外情報」というコーナーがある（＊）。記事は、国際子ども図書館の編集委員会メンバーが国内外の情報をチェックしながら作成している。2008年４月から従来よりも更新頻度を上げ、国内の児童文学賞受賞ニュースなどの発信を増やした。現在、より内容面の充実を図ろうとしている。ご参照の上、ご意見をお寄せいただきたい。

＊ http://www.kodomo.go.jp/resource/child/index.html

（企画協力課協力係）

子どもと本をつなぐ人々との出会い
－ミュンヘン国際児童図書館＆第31回 IBBY 世界大会見聞記－

小沼　里子

2008年９月４日から５日までドイツのミュンヘン国際児童図書館を訪問し、９月７日から10日までデンマークのコペンハーゲンで開かれた第31回国際児童図書評議会（IBBY：International Board on Books for Young People）世界大会へ参加した。以下に出張の概要を記す。

１．ミュンヘン国際児童図書館

ミュンヘン国際児童図書館は、1949年にイェラ・レップマンにより創設された国際的な児童書専門図書館である。1983年にミュンヘン郊外に移り、15世紀に狩猟用の城として使われていたブルーテンブルグ城を改築して利用している。世界各国の児童書を収集し、国内外の研究者等に図書館サービスを行い、子どもと子どもの本を結び付ける多様な活動を行っている。

今回の出張では、東アジア部門担当のガンツェンミュラー文子氏に館内を案内していただいた。

外観は城そのもので、メルヘンの世界に入り込んだかのように感じられた（口絵参照）。館内は中庭を取り囲むようにいくつもの部屋があり、温かい雰囲気に包まれた子どもの貸出室や、ドイツを代表する作家（エーリッヒ・ケストナー、ミヒャエル・エンデ、ジェイムス・クリュス、ビネッテ・シュレーダー、オトフリート・プロイスラー）に関する常設の展示室、研究図書室、書庫などを丁寧に案内していただいた。廊下や階段までも展示スペースとして利用されていて、モーリス・センダックの図書やポスターの展示、グリムの昔話の一場面をデザインしたパネルやちょっとした仕掛けなどを楽しみながら回った。

IBBY オナーリスト受賞作（書庫）

見学の後、言語部門の部長であるヨハン・ウェーバー氏とガンツェンミュラー氏から、図書館活動、整理業務等について詳しくお話を伺った。

現在の所蔵数は約575,000冊（2007年）で、130以上の言語からなる。ミュンヘン国際児童図書館では、閲覧部門とは別に言語専門スタッフがいて、カタログ（目

録）作成、整理、解題情報の付加作業、機関誌『ホワイト・レイブンス（White Ravens)』の執筆等を行っている。また、２年に１度 IBBY 各国支部によって選ばれた外国に紹介したい自国の優良作品である「IBBY オナーリスト」の受賞作が同館に集められるので、件名やキーワードを付与し、解説の英訳をしている。言語部門は13言語分野に分かれているが、多様な業務を10数名の担当者で担っているというのが驚きであった。電子化についてはやや遅れており、1993年以前のカード目録を全て電子化するのが最大の課題であるとのことである。また、当館と同じように、書庫の問題は深刻であり、今後も増え続ける資料に対して、書庫をどうするかというのも大きな課題であるとのことだった。

世界各国の児童書・児童書関連書を収集・整理し、利用に供するという役割は、当館も同様であるが、子どもと本を結び付ける活動はミュンヘン国際児童図書館の方が多様であった。特に、大人向けの展示会に絡めて子どものためのワークショップを行っているところが参考になった。子どもたちが児童書に親しんだり、展示会のテーマについてより知識を深めたり、自由な発想を持ったりできるように工夫されていた。訪問した時は、事務棟のロビーでイスラムを知ってもらうための展示を行っていたが、こういった展示は学校や図書館を巡回し、児童書を通じてそのテーマに関する知識が深まるよい機会になっているようである。「展示やワークショップなどを通じて、子どもたちに（異文化を受入れる）寛容の精神、自由な精神を植え付けたい」と職員の方がおっしゃっていたのが印象的だった。

イスラムに関する展示（事務棟ロビー）

２．第31回 IBBY 世界大会

IBBY は、1953年にイェラ・レップマンにより設立され、子どもと子どもの本に関わる人々をつなぐネットワークとして活動している国際的な組織である。世界大会は隔年で開催され、基調講演や分科会のほか、国際アンデルセン賞授与式や、IBBY オナーリストの授与式、子どもの読書を推進する独創的な活動を称える「IBBY 朝日国際児童図書普及賞」の授与式、同賞受賞者によるプロジェクト発表、総会、関連施設の見学会等が行われる（口絵参照）。

今年の国際アンデルセン賞は、作家賞はスイスのユルク・シュービガー、画家賞はイタリアのロベルト・インノチェンティが受賞した。開会式において、デンマークの女王マルガリータⅡ世によりメダルが授与された。

また、IBBY 朝日国際児童図書普及賞は、「ラオスのこども」（日本／ラオス）と「エディシオン・バカメ」（ルワンダ）の２団体が受賞した。両団体は、本を手にすることが困難な状況下で生きる子どもたちのために読書推進活動を行っているが、創造的で効果的な活動が評価された。プロジェクト発表が行われたほか、コペンハーゲン市庁舎において、授与式と受賞者のスピーチが行われた。

今大会は、「歴史における物語－物語における歴史（Stories in History－History in Stories）」がテーマであった。IBBY 設立の目的の一つが、子どもの本を通じて国際理解を促進し、平和への心をはぐくむことであるが、今大会では過去や現在の世界情勢を反映し、地域紛争などで過酷な状況下に置かれた子どもと児童書についての講演が多かった。子どもたちに本を届ける運動をしているグループの話や、児童書の作家・画家から直接創作活動についての話なども聞くことができた。ある分科会では、ハンディキャップのある子どもに、学習技能や社会生活に関わるスキルを教えるのに、紙芝居で教えることが有効であるという話を聞き、興味深かった。読書推進に関わる分科会では、ネパールやチリなどでの事例が紹介された。地道な活動が成果をあげているのは喜ばしいことである。分科会は少人数で行われることもあってか、活発な質疑応答・意見交換が行われた。

今大会は、約70か国から500名以上、日本からは約50名が参加した。IBBY 世界大会は、関心のある人ならばだれでも参加できる。図書館員、研究者、編集者、作家、画家だけでなく、ボランティアで読み聞かせを行っている人や主婦の方も参加していた。肩書きや社会的立場を超えて「子どもたちによい本を届けたい」という同じ志を持った人々が集う国際大会というのは、ほかに例を見ないのではないだろうか。昼食や夕食会、休憩時間を通して様々な国の人たちと交流できたことは、貴重な経験であった。また、優れた児童書に関する情報を収集することもでき、帰国後、洋書の選書に活用することができた。大会を通じて知り合った人とは、今後も交流を続け、情報交換をしていきたいと思う。

分科会の様子

次回の2010年 IBBY 世界大会は、スペインのサンチャゴ・デ・コンポステラで行われる予定である。関心のある方は是非参加してみてはいかがだろうか。

（こぬま　さとこ　資料情報課副主査）

出張報告：カナダの子ども読書推進活動とそれを支える組織

水戸部　由美

2008年８月５日から15日にかけて、カナダ国立図書館公文書館（Library and Archives Canada：LAC）を訪問し、ケベックで開催された第74回国際図書館連盟（IFLA）大会とモントリオールで開催されたヤングアダルトへの図書館サービスをテーマとする IFLA サテライトミーティングに参加した。ここでは、カナダの子ども読書推進活動とそれを支える国の組織について、今回見聞できたことを報告する。IFLA 大会やサテライトミーティングについては『国立国会図書館月報』573号（2008年12月）をご参照いただきたい。

１．カナダにおける子ども読書推進活動の例

ａ）各図書館の児童サービス（口絵参照）

８月13日、IFLA 児童・ヤングアダルト図書館分科会のオフサイトミーティングで、ケベックのシャーブルク図書館（公共図書館）を訪問した。同館では、乳児への絵本の提供、読み聞かせ、読書クラブ、各種ワークショップ、学校への団体貸出し等、地域に対するきめ細かいサービスについて説明があった。

ｂ）ティーンリーディングクラブ

８月14日、IFLA 児童・ヤングアダルト図書館分科会のオープンセッションにおいて、カナダ・ブリティッシュコロンビア（BC）州グレータービクトリア公共図書館のカーステン・アンデルセン氏が、カナダのティーンリーディングクラブ（Teen Reading Club：TRC）について報告を行った（1）。

BC 州では、広大な国土に住むカナダのティーン（13～19歳）の95％がインターネットにアクセス可能であることを生かし、12歳以下を対象とする子ども向け読書クラブを卒業したティーンを対象とした夏期読書クラブを2005年に始めた。このクラブは BC 州の教育省、図書館協会、地域の公共図書館が協同で企画運営しているが、今ではカナダ国内のほとんどの州及び準州から参加登録があるという。なお、今のところサービスは英語で提供されているが、カナダのもう一つの公用語であるフランス語に加え、カナダのティーンが話しているその他の言語（中国語、パンジャブ語、アラビア語等）でのサービスも視野に入れているとのことだった。

参加者は TRC のウェブサイトで登録を行う。ネット上に図書館員が薦めるテーマごとの図書リストがあり、登録したティーンはそれらの本を読んで書評を書いたり、ディスカッションフォーラムやチャットで自分の好きな本について語り合ったり、創作した詩や物語を投稿したりできる。ティーンが参加できる場が多いのが特徴で、参加者は、図書館員の薦める本より自分で見付けた本について語ることを好むという。

初めの年は参加者1,000人を目標としたが２倍以上の人数が登録し、ほかの州からの参加も増えているという。将来は、子ども向け読書クラブを卒業しかかる“tweens”（10～12歳）にも同様のサービスを提供することを目標としているそうだ。

運営費は年３万ドル（約300万円）で、これにはプログラムコーディネーターの人件費、ウェブデザイン会社の契約費、賞品の費用、印刷費を含む。安全対策として、本名を使用することを禁止し、一つのディスカッションフォーラムに１名以上の図書館員がモデレータとして参加する、といった配慮をしている。ティーンの自己表現要求と読書への興味をうまく引き出すプログラムだと思った。

ｃ）TD サマーリーディングクラブ（口絵参照）

TD サマーリーディングクラブとは、12歳以下を対象とする夏期読書推進プログラムで、カナダの TD（Toronto-Dominion）バンク・ファイナンシャル・グループがスポンサーとなり、トロント公共図書館とカナダ国立図書館公文書館が協力して企画運営している（2)。英語とフランス語それぞれのウェブサイトがある。毎年夏にその年のテーマ及びそれに関連する資料のブックリストや催物の例がウェブサイトに掲載され（2008年のテーマは「大声で笑おう」)、公共図書館員はそれを参考に自分の館のプログラムを考える。全国から多数の図書館が参加しており、IFLA サテライトミーティングの最終日に、革新的で効果的なプログラムを提供した公共図書館に「TD サマーリーディングクラブ賞」が授与された。

２．子ども読書推進活動を支える国の組織

ａ）カナダ国立図書館公文書館（LAC）

カナダ国立図書館公文書館の児童文学サービス部門（Children’s Literature Service：CLS)について、責任者のジョジアン・ポリドリ氏に説明を伺った。CLS の職員は若干名で、組織は文書遺産コレクション局カナダ文書・特別コレクション部文化遺産課に属する。

【収集、整理】収集する資料は16歳以下の青少年を対象とする出版物で、カナダの出版物は納本制度により網羅的に収集し、カナダ関係の国外出版物は購入により収集する。児童文学サービスの所蔵資料は約16万点(うちレファレンス資料が約5,000点)、英語とフランス語の割合はほぼ半々とのことである。選書は CLS の職員が行うが、発注、受入、整理は別の部署が行う。

【サービス】LAC は何歳の人でも利用できる。児童書・児童文学関係の専用閲覧室はなく、請求があれば書庫から資料を出納して一般の閲覧室で提供する。CLS の仕事には、レファレンス回答、毎年特定のテーマに関する図書を紹介する小冊子“Read Up On It”の出版、前述した TD サマーリーディングクラブの企画、後述する二つの組織と協同での児童書データベース“PIKA”の構築等がある。館が企画する児童書関連展示会にも内容面で協力する。

b）コミュニカシオン・ジュネス

英語とフランス語を公用語とするカナダには、両言語に対応した児童書関連組織がある。コミュニカシオン・ジュネス（Communication-Jeunesse）は、ケベック及びフランス系のカナダ人作家による児童文学を広めることを目的として1971年に設立された国の非営利組織である（3)。英語で書かれた良質なカナダの児童文学を広めることを目的とする国の非営利組織としては、1976年に設立されたカナダ児童図書センター（Canadian Children's Book Centre：CCBC）がある。

コミュニカシオン・ジュネスと CCBC は、前述した LAC の児童書データベース "PIKA" の構築に協力している。また、コミュニカシオン・ジュネスは「子どもの図書案内」（*Guide des livres d'ici pour les jeunes*）、CCBC は「子どもとティーンのための最良図書」（*Best Books for Kids & Teens*）という刊行物を刊行し、毎年の優良児童書を紹介している。コミュニカシオン・ジュネスの「子どもの図書案内」はウェブサイトにも掲載されている（4)。

コミュニカシオン・ジュネスは、子ども読書週間や児童書週間等、多数のイベントを企画運営し、読書クラブのネットワーク形成やウェブサイトの構築を行っている。なお、1年間に60万件あるウェブサイトのアクセス件数のうち、2割は国外からのアクセスだと説明があった。

まとめ

カナダでは、地域の図書館、州、国が各レベルで子ども読書推進活動に取り組んでおり、BC 州からカナダ全土に広まったティーンリーディングクラブのように、州主催で全国的に成果を上げているプログラムもある。また、児童書専門の国の非営利組織があって活発に読書推進活動を担い、図書館と協働している。日本と事情が異なるところも含め、カナダの子ども読書推進活動の一端をうかがい知ることができて有益であった。

(1) Canada's Teen Reading Club
http://www.ifla.org/IV/ifla74/papers/155-Andersen-en.pdf

(2) TD Summer Reading Club
http://www.td-club-td.ca/

(3) Communication-Jeunesse
http://www.communication-jeunesse.qc.ca/

(4) Guide des livres d'ici pour les jeunes
http://www.communication-jeunesse.qc.ca/actualites/breves/fiches.php?id=50-56-12214

サイト参照日：2008年12月10日

（みとべ　ゆみ　企画協力課協力係長）

世界の訪問者との出会いから

中野　怜奈

私は、2008年４月から、海外から来館した方々に国際子ども図書館をご案内しています。今までに、アメリカ、カナダ、韓国、フィンランド、ベトナム、オマーン、ドイツの、図書館、大学、文化センター、政府機関の方々をご案内しました。フィンランドの児童書作家の方、免震構造に関心があり、ヘルメット着用で地下部を見学された方、様々な方との出会いがありました。

韓国からいらっしゃった方は、第二資料室の書架と非常に似たデザインの書架を母国で見たことがあり、ひょっとすると昔日本で作られたものではないかとおっしゃっていました。歴史を越え、資料室に並ぶ世界各国の子どもの本の間を並んで歩くことのできる時代の平和を思いました。

あるアメリカ人の方は、『ゆかいなホーマーくん』を見て、「子どもの頃大好きだった本だ」と息を弾ませていらっしゃいました。私もその本を繰り返し読んだことを思い出し、父親ほどの世代のその方と私が、別の国で同じ本を読んで子ども時代を過ごしていたのだと、胸を熱くしました。人生の早い時期にページの向こうで主人公と共にする経験は、月日を経て他者と分かち合う中で、一層味わい深く心に響くようになります。

当館の子どものへやにある、二つの小さな窓。毎月異なる絵本が飾られたその窓を来館者に見ていただく度に、確信することがあります。「子どもたちにとって、本はまだ見ぬ世界に続く窓である」。それはきっと、子どもの本の持つ力を信じて当館に足を運ぶ、すべての人に共通の想いです。

（なかの　れいな　企画協力課非常勤調査員）

イランの児童図書

愛甲　恵子

イランの首都テヘランのテヘラン大学前には大きな本屋街があり、日々膨大な量の本が取引されている。本屋の主人は様々なジャンルの本について精通しており、的確な情報を客に提供してくれるのだが、この情報集積地テヘランにあって、児童書専門店を見付けることは案外難しい。一般書店にも児童書や絵本が片隅に置いてあったりすることもあるが、明らかに「おまけ」扱いで、近年様々な絵本原画コンクールで入選し、話題となっている絵本はほとんど見付けることができないのだ。絵本については書店の主人に聞いても曖昧な返事しか返ってこない…。

実はそのような絵本を見ることができるのは、テヘラン市内に点在する児童書出版社の直営店である。筆者は全く偶然に、本屋街から少し離れたその直営店を見付けることができた。そこで初めて多くの絵本を手にとったのだが、その時に感じた興奮が「イランの絵本を日本の人にも知ってもらいたい」という気持ちへとつながっていくことになる。

その願いが通じたのかどうか、筆者は2007年の夏から冬にかけて、国際子ども図書館のペルシャ語資料の選書リスト作成に携わることができた。本稿では、リスト作成をどのような観点から行ったかということを端緒として、イランの児童図書を取り巻く状況について概観してみたいと思う。

国際舞台での活躍に注目する

選書リストを作成する上で最初に注目したのが、国際コンクール・公募展での入選作である。イラン人イラストレーターの活躍が目覚ましい昨今であるが、国際舞台でイラン人の名が目に付くようになるのは1960年代終わりからである。主なところでは、ファルシード・メスガーリー（1969年ブラティスラヴァ世界絵本原画展（BIB）佳作、1974年国際アンデルセン賞画家賞）、ヌーレッディーン・ザッリーンケルク（1971年 BIB 金のリンゴ賞）、アリーアクバル・サーデギー、ニークザード・ノジューミー（共に1978年野間国際絵本原画コンクール大賞）等が挙げられる。彼らの受賞はイランの絵本の水準の高さを国際的に知らしめる重要なきっかけとなったが、特にアンデルセン賞のファルシード・メスガーリーの作品は注目度が高く、日本でも1984年にほるぷ出版より『ちいさな黒いさかな』、『青い目のペサラク』、『赤ひげのとしがみさま』の３冊が翻訳出版されている（現在は絶版）。なお、この時代の受賞作については、文章も哲学的な示唆に富み、深く考えさせるような読み応えのあるものが多い。心の奥に届くような文章がまずあって、それに呼応する形で生まれた絵が国際的なレベルで評価された、ということなのである。

このように颯爽と国際舞台に現れたイラン人イラストレーターは、その後も様々

な場で受賞者を輩出することになる。そして2000年代後半に入って、その数が一気に増加した。ボローニャ国際絵本原画展では、2006年に７名、2007年に６名、2008年に２名が入選しており、また野間国際絵本原画コンクールでは、2006年は17名、最新2008年の回でも12名もの受賞者を出している。そして、2005年の BIB のグランプリは史上初めてイラン人イラストレーター、アリーレザー・ゴルドゥーズィヤーンが受賞した。最近のこういった活躍でイランの絵本を知ったという方も多いであろう。何を隠そう、筆者もその一人だったのだ。

以上のように、ある程度まとまった数になる受賞作品だが、リスト作成前の蔵書調査で、2000年以降の作品については出版社の寄贈によりすでに収蔵されているものが多いことが分かった。受け入れ処理も済み、書棚に並んでいる。受賞から間を置かずにそれらの本を手に取ることができるのは大変嬉しいことである。一方、残念なことに1970～1990年代の受賞作はほとんど入っていなかった。これらの作品は絶版となっているものが多いため入手困難で、探すとなると古書業界をあたるしかないかもしれないが、黎明期のイランの絵本界を盛り上げた彼らの作品は、当時の絵本作りについて知る上で大変貴重な資料となるので、何年かかっても是非とも国際子ども図書館に入ってほしいと思う。

絵本以外の児童書の分野では、国内外で様々な賞を受賞し、2007年にリンドグレーン賞にノミネートされたホウシャング・モラーディ・ケルマーニーという作家に注目した。1944年生まれのケルマーニーは、ヤングアダルト向けの小説を多数世に送り出してきたが、中でも少年マジードと強いおばあちゃんビービーとの貧しくもユーモアに溢れた生活を描いた『マジードの物語』（*Ghesseh-haye Majid*）は、テレビでシリーズ化され、子どもから大人まで大変な人気を博した。英語やフランス語、スペイン語などに翻訳され、ヨーロッパでも広く読まれているケルマーニーの作品群は、人生に対して真面目であるがゆえに引き起こされる温かい笑いと、それと表裏一体の形で現れる切ない気持ちの描写が秀逸で、読者を惹き付ける。これらは国際子ども図書館に入ってほしいというのは言うまでもなく、日本語の翻訳出版も期待したい作品である。

なお、以上のような受賞情報や児童図書の動向を知るのに大変役立つ資料が、文化イスラーム指導省発行の『ケターベ・マーフ：児童・青少年』である。これは1997年創刊の児童・青少年向け書籍に関するペルシャ語の月刊情報誌で、国内・国際コンクール等の受賞情報を含む新着情報、新刊案内、特集記事、出版社の動向、書評、毎月開催される各種座談会（勉強会）のレポートなど、様々な種類の情報を含んでいる。月刊と称しているものの、たまに何ヶ月分かが合本になって出たりするので最新情報ばかりではないが、児童書界の大きな流れをつかむことができる情報誌であることは間違いないだろう。ちなみにこの雑誌はインターネット上で全ページが公開されていて（http://www.ketab.ir/）、だれでも見ることができる。

国内に目を転じると

国内にも児童書に関する賞がいくつか存在している。雑誌や出版社が主催するものがあるほか、選書にあたって特に重視したのが「児童図書評議会賞」である。これはイラン児童図書評議会（The Children's Book Council of Iran）が毎年発表する賞で、１年間に出版された児童図書について精査し、イランの児童文学発展に寄与したと認められる作品に与えられるものである。物語部門、イラストレーション部門、詩部門、ノンフィクション部門、翻訳部門といった部門別に選出され、選外のものについても「良」、「並」、「不良」といった評価がなされる。結果は全て同会発行の季刊誌上で公表される。今回、その評価を大いに参考にさせてもらった。

児童書に関わる機関

イラン児童図書評議会が出てきたので、ここで少し、イランの児童書に関わる諸機関を紹介したいと思う。まずこのイラン児童図書評議会だが、これは1962年にイラン児童文学の発展を目的として設立された非政府・非営利組織である。上記のような児童書の評価のほか、児童文学やイラストレーションに関する大人向けのワークショップの主催、読書推進運動、青少年向け百科事典の編纂など、多岐にわたる活動を展開している。また、国際児童図書評議会（IBBY）のイラン支部として、国際アンデルセン賞へ推薦する作家の選定や、IBBY のオナーリスト（優良作品）への推薦図書の選定を行うのもこの組織である。イランの児童書界を牽引していくリーダー的な存在であると言えよう。

そしてその少し後に設立されたのが児童及び青少年知的発達研究所（Institute for the Intellectual Development of Children & Young Adults、通称 KANOON、カーヌーン）である。

カーヌーンの移動図書館（筆者撮影）

カーヌーンについては本誌８号（2008年３月刊）の酒井貴美子氏によるレポート（pp.30～32）に詳しいが、1966年の設立以来、半官半民の組織としてその資金力を生かし、幅広い活動を行ってきた。児童書の出版以外に、映画やアニメーション、玩具の製作、移動図書館を含めた図書館の運営、絵画教室の開講、アニメーションやストーリーテリングの国際大会なども主催する。なお、1960～1970年代に作られ、原画展などで入選した絵本作品の多くが、カーヌーンから出版されたものである。イランの絵本を国際的に認知させることに一役買ったという点でも評価される組織である。ちなみに、近年の国際原画展でもカーヌーンの絵本は頻繁に入選を果たしているが、それはコンクールへの応募を積極的に奨励してきた成果でもある。共に入選作品を多く出している民間の出版社シャバーヴィーズ（Shabaviz Publishing Company）もそうなので

あるが、単なる情報提供だけでなく、応募作品をとりまとめ、英語のあらすじ作りや申し込みを引き受け、一括してコンクールに応募するというかなり具体的なサポートを行っている。これは制作になるべく集中したいイラストレーターたちにとってはとてもありがたいし、また自社の本を国際的にアピールしたい出版社にとっても利のある行為である。イランには優秀なイラストレーターが多く存在するため、このサポートが生む効果が更に大きくなっているのである。

話は戻るが、もう一つ紹介しておきたい機関がある。比較的新しいながらも精力的な動きを見せている児童文学歴史研究所（The Institute for Research on the History of Children's Literature in Iran：IRHCLI）である。2000年に設立されたこの非政府組織の活動内容は、児童文学の歴史を古代からひもとく全10巻の大部『イラン児童文学の歴史』（７巻まで刊行済）の刊行をはじめとして、様々な研究成果の出版、児童書の出版、研究者の育成、資料の収集、外国の児童図書研究者との交流などである。なお、『イラン児童文学の歴史』の執筆者の一人で同所の専属ライターであるモハンマド・ハーディー・モハンマディは、研究者でありながら、国際アンデルセン賞の作家賞にノミネートされたこともある児童文学者である。古い物語の再話やアルファベットを物語の中で学ぶための絵本のテキストを手掛けるなど、同所の児童書制作の現場でも大いに筆力を発揮している。また、この機関はホームページ（http://www.chlhistory.org/）が大変充実しており（英語ページもあり）、研究所に蓄積された情報を検索、購入することができるデータベース（Iranak）も公開されている。

以上見てきたようにイランでは児童書に関する機関が活発に機能している。そういった環境があって、コンクールに入選するような優秀な作品が生み出されているのである。彼らの真摯な活動が、今後更にどのような実を結んでいくのか、大変注目されるところである。

国内の出版状況

イラン国内の児童書出版事情を確認しておこう。先の『ケターベ・マーフ』の統計によれば、イラン太陽暦1384年（2005年春分の日から１年）は、新刊出版数が約2,900点、再版以降が約4,400点である。そのうち約2,300点が翻訳なので、全体の３割弱が外国ものということになる。なお、出版地を見るとテヘランでの出版は約6,200点、そのほかの地方が約1,100点となっている。また、本の形態としては、ソフトカバーが圧倒的に多い。特に絵本は真ん中をホッチキスで留めただけの簡易な作りであることが多いが、これは原材料費をなるべく抑えて低価格を維持しようという目的のためである。だが、ここ２、３年でハードカバーの本もだいぶ見かけるようになってきた。また、ソフトカバーであっても、上質な紙が使われ、印刷の質も上がっていると感じる。国際的にイランの絵本の人気が高まり、外国への輸出に堪える形状のものを作る必要性が出てきたのかもしれない。

ところで、イランでは著作権が十分に尊重されているとは言いがたい。特に外国

の作品は著者の承諾を得ることなく、勝手に翻訳して販売している現状がある。街に溢れるディズニーやハリー・ポッターシリーズなどはよい例だ。一方国内の作家も権利関係についてはトラブルに発展することが少なくないようだ。出版社が権利を買い取る形の契約が多いため、ベストセラーとなって版を重ねたり、外国での翻訳出版が決まっても、著者には一銭もお金が入らないという事態が起きているのだ。そのような状況を踏まえ、最近では著作権に関するシンポジウムなどが開かれているようだが、せっかく育ってきた優秀な人材を海外に流出させないためにも、作家・イラストレーターと出版社の両者が納得する体制作りが急務であろう。

絵本の特徴

さて、最後に絵本の特徴について少し触れておきたいと思う。

絵本が扱う内容は当然のことながら多岐にわたっている。ファンタジー、昔話、偉人伝、宗教、イラン革命からイラン・イラク戦争まで様々だが、特に重要な傾向として挙げられるのが、詩という表現形式に関係するものが多い、ということである。実はイランは知る人ぞ知る、詩の国だ。壮大な民族叙事詩『シャー・ナーメ(王書)』(*Shah nameh*)の作者フェルドウスィー、ゲーテに深い影響を与えたと言われる叙情詩人ハーフェズ、英語からの重訳も含め日本でも様々な翻訳が出ている四行詩『ルバイヤート』(*Roba'iyat*)の作者ハイヤーム、そして2007年に生誕800年を迎えた今も世界各地にその深淵なる詩の世界を愛するファンがいる神秘主義詩人ルーミー(モウラヴィー)など、著名なペルシャ古典詩人は枚挙にいとまがない。20世紀初めに、古典詩の韻律を排した新しい詩のスタイルが確立されても、それによって古典詩の人気が衰えることはなく、『シャー・ナーメ』を散文にして読みやすくしたものや、ルーミーの神秘主義叙事詩『精神的マスナヴィー』(*Masnavi-ye Ma'anavi*)の一節を題材にとった絵本などが今も出版され続けている。こういった、古典詩に題材を取ったもののほかに、易しい言葉をリズムに乗せてつづった詩の絵本や、詩人が散文の物語を書いて、それに絵を付けている絵本なども多い。イランの子どもたちは、幼い頃から様々な形で詩という表現形式に親しんでいるのである。

また、新しい動きとして注目されるのが、カーヌーンが始めたペルシャ語以外の言語での出版である。イランは多民族国家で、公用語のペルシャ語を母語とする人は人口の半分ほどしかいない。トルコ語やアラビア語系の言語を母語とする人も多いのである。筆者が昨夏の東京ブックフェアで見せてもらった絵本は、立派なハードカバーでシリーズ化されていた。将来的には朗読の CD も付属させるかもしれないとのこと。それらの多言語絵本を今後どのように活用していくのか楽しみだ。

レベルの高さは知られていたものの、日本ではなかなか紹介されることのなかったイランの児童書。その多彩な世界への扉はまだ開かれたばかりだ。多くの本が国際子ども図書館に収蔵され、更に展示などによってたくさんの人の目に触れることを願っている。　　(あいこう　けいこ　翻訳家)

ラテンアメリカ（スペイン語圏）の児童書

神戸　万知

はじめに

2007年に、国際子ども図書館から依頼を受けて、中南米（スペイン語圏）の児童書ウォントリストを作成することになった。

しかし、この地域は、日本でまだなじみが薄い。そこでまずは、地理的、文化的な定義を明確にしたい。

対象とする国について

「中南米」は地理的、「ラテンアメリカ」は文化的なくくりとされている。どちらも、ほぼ同じ地域を指す。しかし、「中南米」とした場合、「北米」に属するメキシコは除外されてしまう。対して、ラテンアメリカは、メキシコ以南のアメリカ大陸の国を指す。アメリカ大陸のスペイン語圏の中で、とりわけ重要なメキシコを外すわけにはいかないため、ここでは「ラテンアメリカ」という文化的なくくりを採用したい。

また、地理の前に、スペイン語圏という使用言語の指定があるため、ポルトガル語圏のブラジル、英語圏のベリーズなどは、ラテンアメリカに属しているが、今回は外した。

一方で、アメリカ大陸ではないが、カリブ諸島にあるスペイン語圏のキューバ、ドミニカ共和国は加えた。合わせて、18か国である。アメリカ合衆国の準州だが、独立した文化を持つプエルトリコも、今回はここに含めた（オリンピックでも、プエルトリコとして出場している）。

したがって、スペイン語圏でラテンアメリカに該当する国（と準州）は、地理的に分類すると以下のとおりである。

北米	メキシコ
カリブ海	キューバ、ドミニカ共和国、プエルトリコ（アメリカ合衆国準州）
中米	グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、パナマ
南米	ベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ

＊ドミニカ共和国だけは、同じくカリブ海にある「ドミニカ国」と区別するために、「共和国」をつけている。

国際子ども図書館の所蔵状況

ウォントリスト作成にあたって、まずは所蔵状況を見せていただいた。2007年７月時点で、ラテンアメリカ諸国で出版されたスペイン語の蔵書は、以下＜表＞のようになった。なお、調べかたは、国立国会図書館の NDL-OPAC を使用し、所蔵館を「子ども」、本文の言語を「スペイン語」として、出版国ごとに検索した。

＜表　国別の蔵書数＞

	国名	蔵書数
アメリカ合衆国準州	プエルトリコ	3
北米	メキシコ	237
中米	グアテマラ	0
	エルサルバドル	0
	ホンジュラス	0
	ニカラグア	1
	コスタリカ	26
	パナマ	0
カリブ海	キューバ	0
	ドミニカ共和国	0
南米	ベネズエラ	34
	コロンビア	87
	エクアドル	16
	ペルー	218
	ボリビア	0
	チリ	40
	アルゼンチン	104
	ウルグアイ	1
	パラグアイ	3

ラテンアメリカ諸国の中で、規模が大きく、産業も進んでいるメキシコ、アルゼンチン、チリは、蔵書数が多いだろうと予想していた。おおむねそのとおりだったが、それでも、チリ、アルゼンチンは思ったより少ないという印象だ。

逆に、予想外だったのがペルーだった。メキシコに次いで、２番目に蔵書が多い。これは、日系の大統領が登場し、日本とのつながりが深いせいもあるのだろうか。だが、国そのものを考えると、たとえばエクアドルやボリビアより、そう児童書が発達しているとは思えない。

一方で、教育と福祉に力を入れているコスタリカの蔵書がたったの26冊だったのは意外だった。

芸術家との縁が深いキューバも、児童書は１冊も蔵書がないのは、驚いた。しかし、キューバの場合は、たとえ大量に出版されていても、日本まで流通するルートがないのかもしれない。ただ、キューバを代表するホセ・マルティの書いた子ども向けの『かんたんな詩』、『ローサのくつ』などは、いつでも入手可能だろう。

さて、この国別の蔵書数は、あくまで目安であって、必ずしも正確な数ではなかった。というのは、多くの国が同じ言語を使用しているため、作家も作品も、簡単に国境を越えてしまうのである。

スペイン語圏ゆえの問題点

スペイン語圏の国は数が非常に多い。ラテンアメリカ以外にも、当然ながらスペインがあり、アメリカにもスペイン語人口はどんどん増えている。

そのため、作者は、必ずしも出身国で著書を発表するとは限らない。同じ作品が、出身国以外のスペイン語圏の国から改めて出るケースも目立つ。政治的に不安な状況も度々あり、外国に亡命する作者もいる。移住先の公用語が同じスペイン語であれば、作家活動はそのまま続けられて便利だ。そのため、国別で抽出した数から漏れている作家、作品は、じつはかなり存在するだろう。

たとえば、ウルグアイを代表する作家オラシオ・キローガ（Horacio Quiroga）の洋書の出版国には、日本、ブラジル、スペイン、チリもあり、蔵書13冊中、出版国がウルグアイになっているものはたったの１冊だけだった。

この問題は、作家・作品を探す際にも非常にやっかいな足かせとなった。出版国＝作家の出身国とは限らず、他国に移住する作者も多いため、プロフィールを見ても、出身国が分かりにくい場合が少なくないからだ。

さらに、各国の IBBY 支部など主要団体の推薦図書リストも必ずしも自国の作家にこだわっていない。（場合によっては、英米の翻訳書が入っていたりする。）

スペインでもっとも歴史のある児童文学賞「ラサリーリョ賞」でも、スペイン語で書かれた本であれば、作者の出身国を限定していない。ウルグアイのリカルド・アルカンターラ（Ricardo Alcantara）やキューバのイルダ・ペレーラ（Hilda Perera）など、ラテンアメリカの作家も受賞している。

このため、リスト作成するときは、作家の出身国の確認を毎回した。

ウォントリスト作成にあたって

情報の収集にあたって、主に、IBBY 各国支部の推薦リストやラサリーリョ賞の受賞者などをインターネットで調べた。同時に、イサベル・ショーン（Isabel Schon、メキシコ出身でアメリカ在住のスペイン語圏児童文学の研究者）のブックリストが大変参考になった。また、国際子ども図書館蔵書で、ラテンアメリカの児童文学総論『むかしむかし…アメリカで』（*Habia una vez...en America*）も非常に役に立った。

まず、＜表＞で蔵書数が０または１桁の国を重点的に加えるようにした。

ただ残念ながら、ホンジュラス、パナマ、ドミニカ共和国の本は、入手可能なものを見付けることができなかった。パラグアイももう少し増やしたいところだったが、思うように見付からなかった。

キューバ、ボリビアの本を多く追加できたのは、今回の収穫だろう。

エルサルバドルに関しては、母国で活動する作家の作品はなかったものの、アメリカに移住して、スペイン語で作品を発表しているホルヘ・アルグエタ（Jorge Argueta）がいた。

なお、入手可能かどうかは、アメリカのインターネット書店、アマゾン（Amazon.com）をおもな目安にした。アメリカは、ヒスパニック人口が爆発的に増えているため、スペイン語の本の需要も高まり、取扱数も多い。実際、予想以上に、各国の本を扱っている。中南米の書店が、情報も少なく不安定なため、アマゾンの情報の方が確実で正確だと判断した。これは、価格についても同様である。

出版年については、あくまでその出版社が出した版の「出版年」であり、初版年ではないことが多い。

全体としては、やはり数も情報も少なく、本もすぐに入手困難になってしまうようである。最近のブックリストに載っていても、すでに入手不可能な場合が何度もあった。

世界的に有名な作家たち

ラテンアメリカの児童書は、日本や英米に比べると、質量共に、やはりまだまだ未発達なのが現状だ。自国の作家・作品もそれほど多く育っていない。代わりに、英米の作品を翻訳出版して補っているような部分もある。

しかし、その中で貴重なのが、世界的に有名な作家たちだ。

かつて日本で芥川龍之介の『杜子春』や有島武郎『一房の葡萄』が出た状況と似ている、といえば分かりやすいかもしれない。世界的な作家や、国を代表する作家の作品を調べると、子ども向けに書かれた作品が数多く見付かった。大人向けに発表した作品が、絵本の形になって再出版されることもある。国際子ども図書館の蔵書には入っておらず、入手可能なものはほぼすべて追加した。

例えば、ノーベル文学賞作家だと、コロンビア出身のガブリエル・ガルシア・マルケスによる『火曜日の昼寝』、メキシコのフアン・ラモン・ヒメネスの『フアン・ラモン・ヒメネスと子どもたち』、グアテマラのミゲル・アンヘル・アストゥリアスの『宝石でかざった少年』などである。ほかにも、ニカラグアのルベン・ダリオ、キューバのホセ・マルティ、ウルグアイのホルヘ・ルイス・ボルヘスら、各国を代表する作家も、子どもに向けて書いた作品があった。これら著名な作家だと、すぐに絶版になる可能性も低く、比較的、入手しやすい。そして、発展途上の児童書を支える大きな存在として重要である。

アメリカという存在

ラテンアメリカを語るときに、どうしても無視できないのがアメリカという国の存在である。これは、児童書の世界においても同じといえよう。

現在、アメリカでは、ヒスパニックといわれる、ラテンアメリカ諸国からの移民（合法、非合法問わず）とその子孫の数が増えつづけている。21世紀初頭にアフリカ系アメリカ人の数を超え、第一マイノリティになっている。大統領選挙でも、ヒスパニックの支持を得ることが勝利の鍵とされているくらいだ。

ヒスパニックの人口が増大するにつれ、近年、スペイン語の児童書もかなり多くなった。バイリンガルの絵本もたくさんある。インターネット書店でも、「スペイン語」というカテゴリーが加わって久しい。おかげで、スペインやラテンアメリカ諸国からの本も入手しやすくなった。

ヒスパニック作家には、英語もスペイン語も両方自分で書く者もいるが、発表言語を英語に定めて（部分的にスペイン語表現は入れることはある）スペイン語版は翻訳者にゆだねる者もいる。例えば、キューバ出身のアルマ・フロール・アダ（Alma Flor Ada）は前者、ドミニカ共和国出身のフーリア・アルバレス（Julia Alvarez）は後者である。どちらも、スペイン語圏諸国で生まれ育ち、のちにアメリカに移住した。

こういった作家を、どこの国に分類するかは、非常に悩ましい問題である。日本と違って二重国籍が可能であれば、国籍で判断することも難しいだろう。ただこれは、児童書に限った問題ではない。ラテンアメリカの文学案内に、コラムという形でヒスパニック作家・作品が紹介されていたりもする。

英語で書かれた作品がスペイン語に翻訳され、ラテンアメリカの、特にその作家の出身国に「輸出」される場合もある。もしかしたら、アメリカにおけるスペイン語の児童書の発達は、ラテンアメリカ諸国よりもスピードが速いかもしれない。こうしてアメリカでスペイン語の本の需要が高まれば高まるほど、貧しい母国を離れ、アメリカに移って創作活動を続けるケースはますます増えていくだろう。

さいごに

ラテンアメリカ、と簡単にひとくくりにしてしまうが、社会主義国のキューバ、世界で初めて軍隊を廃止したコスタリカ、常夏の楽園のようなドミニカ共和国、標高4,000メートルの地でリャマを放牧するペルーなど、政治的、社会的、文化的、地理的背景は多種多様である。少しでも、個別に認識が可能になるよう、作成したウォントリストを基に蔵書が充実していくことを願っている。

ただ、ラテンアメリカは政治的に不安定な時期や場所が多く、児童書もなかなか発達できない状況に置かれている。少しずつでも、それぞれの国の児童書が増え、発展していくことを祈りたい。同時に、各国内の作家・作品だけではなく、スペインやアメリカなど、ほかの地域に移って活躍する作家の動向も見逃せない。

（ごうど　まち　翻訳家）

童話のふるさと

宮川　健郎

高田、花巻、半田　11月の初めに高田へ行った。今は新潟県上越市になっている、小川未明のふるさとである。夜に高田に入り、ホテルに泊まって、朝起きてみると、夜半からの時雨がやんだところだった。空気は冷たく、雲は低くたれこめている。高田はもう、冬の入口に立っていた。午前中に、市立高田図書館の中にある小川未明文学館を訪ねる。特別展「小川未明の東京－童話作家宣言まで－」（2008年９月27日～11月３日）の開催期間終了が迫っていた。東京から高田に行き、そこで、未明の東京体験の展示を見るというのは面白い。

未明文学館を訪れるのは、８月以来、２度目だった。今年の夏には、そのほかにも、宮沢賢治のふるさと岩手県花巻市と宮沢賢治記念館、新美南吉のふるさと愛知県半田市と新美南吉記念館へも行った。未明、賢治、南吉それぞれの童話のアンソロジーを編む仕事をしていて、巻末には、作家の故郷を訪ねる文章を「童話紀行」と銘打って書くことになっていた。そこには写真も多数掲載するので、写真家の坂口綱男さんと一緒に、日盛りの中、作家ゆかりの場所を歩き回った。「すべての詩は、少年時代の感覚から生れる」－これは、小川未明の言葉だけれど、私たちは、作家たちの文学を生み出した風光の中を歩いたのだ。

ことばのふるさと　その小川未明に「月と海豹（あざらし）」という童話があり、その初めの方に、「寒い風は、頻（しき）りなしに吹いていました。子供を失った、海豹は、何を見ても悲しくてなりませんでした」というくだりがある。1926年にアテネ書院から刊行された童話集『兄弟の山鳩』に収録されている作品だけれど、「寒い風は、頻りなしに吹いていました」の「頻りなしに」という言葉が分からない。「頻りに」か、「頻りなしに」という音から連想する「引っ切りなしに」なら、すぐ分かるのだけれど、「頻りなしに」は分からない。研究者向けの児童文学全集である、ほるぷ出版『日本児童文学大系』の小川未明の巻や、過去に刊行された、新潮社、潮出版社、旺文社、講談社、岩波書店各社の文庫の未明童話集を見たが、「月と海豹」が収録されている本で、この言葉は、そのまま「頻りなしに」か、そうでなければ、ひらがなで「しきりなしに」となっている。ひらがなの「しきりなしに」からは、「仕切りなしに」という漢字を思い浮かべ、仕切りなく、つまり、境目もなく寒い風が吹くということかと考えてみるが、これも、腑に落ちない。

８月の初めに高田を訪れた後には、「月と海豹」の「頻りなしに」のことを、会う人、会う人に話すようになった。その中に、新潟市芸術文化振興財団の学芸員で、ウェブサイト「坂口安吾デジタルミュージアム」を管理する岩田多佳子さんがいた。坂口安吾も、小川未明と同じ新潟の生まれ育ちの作家である。安吾は、新潟市内の出身だけれど。岩田さんは、未明の「頻りなしに」から、やはり、坂口安吾を連想

して、安吾の作品の中に「異体の知れない」という表現があるとおっしゃった。「異体の知れない」というのも、分からないことばだ。「得体の知れない」なら、正体の分からないという意味だけれど。新潟方言では、エの音とイの音が交替する。安吾は、頭の中では「得体の知れない」というふうに思っているのだけれども、実際に発音するときには、「いたいのしれない」といい、それを書くときには、「異体の知れない」と書いたのではないか…。岩田さんは、いくつかの安吾の作品から例を挙げてくださった。「着流しの医者は村の娘を嫁にしたが、異体の知れないボヘミアンで、…」(『吹雪物語』1938年）などである。

なるほど。新潟方言で、もし、ヒとシも交替するならば、「頻りなしに」は、やはり、「引っ切りなしに」だということになりそうだけれど、どうなのだろう。ここまできて、いよいよ専門家に聞いてみることにした。私の最初の勤め先である宮城教育大学で同僚だった、遠藤仁さんに電子メールを送る。遠藤さんは、日本語学、特に方言の専門家だ。遠藤さんは、『新潟県方言辞典 上越編』(渡辺富美雄編、1973年）という本を紹介してくれた。その見出し語から、「しげ（＝髭)」「しっくりかえす（＝ひっくりかえす)」「しっくりかえる（＝ひっくり返る)」「しっこし（＝引越し)」「しっつぶす（＝ひっ潰す)」などなどを拾うことができ、「ヒ＞シ」の音変化が盛んに起こっていることが分かる。「頻りなしに」は、やはり、私にとっての「引っ切りなしに」なのだ。ただ、それを「頻りなしに」と書くところに小川未明がいるのである。この「頻りなしに」から、私には、未明の身についた言葉、母語とでもいうべきものが見え始めた気がする。そして、そこにこそ、未明の文学のオリジン（起源）があるのではないか。未明の身についた言葉こそが、未明童話のふるさとなのではないか（以上について詳しくは、宮川健郎編『名作童話 小川未明30選』春陽堂、2009年１月を参照のこと)。

上野桜木　2008年４月から、国際子ども図書館の客員調査員を務めている。月に２回出勤して、所蔵資料の調査などをしている。もう秋も終わりの出勤日、昼休みに、食事を兼ねて図書館の界隈を散歩していたら、東京芸大の向こうで、住所表示のプレートに「上野桜木」とあるのを見付けた。ああ、ここは、以前、国柱会があった辺りだ（旧・上野桜木町にあった)。国柱会は、宮沢賢治が入会した日蓮宗の宗教団体で、1921年１月に賢治が花巻から突然出京した際には、まず、国柱会館を訪ねている。このときの家出は７か月ほども続くが、賢治は、しばしば国柱会に行き、国柱会の高知尾智耀の後年の言葉によれば、昼に上野公園で行われた道路布教にもよく参加していたという。当時の書簡などから、賢治が上野の帝国図書館に通っていたことも知られている。国際子ども図書館の施設は、1906年に作られたこの帝国図書館の建物を引き継いでいる。国柱会の高知尾の勧めで、賢治は童話を多作し、８月に妹トシ喀血の知らせを受けて帰郷したときには、トランク一杯の原稿を持ち帰ったと言われる。国際子ども図書館のある上野は、賢治童話のもう一つのふるさとなのではないか。

（みやかわ　たけお　国立国会図書館客員調査員）

活動報告

（2008年１月～12月）

１．展示会

国際子ども図書館では、子どもの本の持つ魅力を伝えるとともに、子どもと本との出会いの場を提供することを目的として、国際子ども図書館所蔵児童書を中心に一部他機関から借用した資料を交えて、子どもの本・文化に関する展示会を行っている。2008年は、３回の展示会を開催した。

○「チェコへの扉ー子どもの本の世界」

［2008年１月26日（土）～９月７日（日）　計183日：入場者数58,957人］

東京外国語大学名誉教授千野栄一氏旧蔵のコレクションを含む当館所蔵のチェコの児童書及び翻訳書から263点を展示した。チェコの昔話や伝説、チャペック兄弟をはじめとする代表的な作家、詩人、画家の作品によりチェコ児童文学の歩みをたどった。また、特別コーナーでは、しかけ絵本や、「もぐら」「カッパ」などのチェコで愛されているキャラクターが登場する絵本などを紹介した。＜口絵及び本文３～７ページを参照＞

○「2006年度国際アンデルセン賞・IBBY オナーリスト受賞図書展」

［2008年８月21日（木）～９月21日（日）　計27日：入場者数7,062人］

スイスに本部をおく国際児童図書評議会（IBBY)の日本支部である社団法人日本国際児童図書評議会（JBBY）との共催。IBBY が２年に１度開催する世界大会で表彰する国際アンデルセン賞受賞者の邦訳書と IBBY オナーリスト（優良作品）賞の2006年度受賞図書と関連する邦訳書、合わせて209冊を展示した。通常の展示会では、なかなか実際の本に手を触れることができないが、この展示会では、57の国・地域から選ばれた世界の子どもの本を直接手にとって見られるように工夫をし、利用者にも好評であった。＜本文８ページを参照＞

○「童画の世界ー絵雑誌とその画家たち」

［2008年９月20日（土）～2009年２月15日（日）　計113日：入場者数42,984人］

「子供之友」、「コドモノクニ」、「コドモアサヒ」などの昭和前期までの絵雑誌と、そこで活躍した、竹久夢二、岡本帰一、武井武雄、初山滋、村山知義などの代表的な童画家たちの作品を紹介しながら、絵雑誌の誕生から衰退までの流れをたどった。また、当時の児童雑誌の中で生まれ、現在も親しまれている「七つの子」、「かなりあ」などの童謡や童話、子どもたちのお楽しみの付録、童画家たちが描いた漫画などの特別コーナーも設け、国際子ども図書館所蔵資料を中心に、途中展示入替を行

い、延べ389点の資料を展示した。今年度は展示会に関連した広報用ポストカードの配布を行っているが、童画展は人気が高く、計３種類のポストカードを配布した。＜口絵及び本文９～11ページを参照＞

２．イベント

国際子ども図書館では、各展示会期間中、展示内容への理解をより一層深めるため、展示会に関連した講演会やギャラリートークを行うなど、様々な催物を開催している。

○講演会「チェコ児童文学への招待」

［2008年１月27日（日）：参加者131名］

「チェコへの扉－子どもの本の世界」展の関連行事として、チェコ児童文学研究者であり本展示会監修者でもある駐日チェコ共和国大使館翻訳官の村上健太氏による講演会と、「アンサンブル Forest」によるチェコ音楽のサックス四重奏を行った。

チェコの子どもの本が口承文芸から誕生した18世紀から現代に至るまでの歴史を、それぞれの時代の有名な作品に触れながら概観し、チェコにおける児童文学の歩みを、日本での翻訳事情を含め幾多の具体例を引きながら示すなど、展示会への理解を深めるにふさわしい講演であった。＜本文５～７ページを参照＞

○監修者によるギャラリートーク

［2008年３月16日（日）：参加者94名］

「チェコへの扉－子どもの本の世界」展の期間中、本展示会監修者の村上健太氏によるギャラリートークを計２回実施した。

○子どものための絵本と音楽の会「くるみ割り人形」

［2008年３月23日（日）２回実施：
参加者190名（保護者を含む）］

東京のオペラの森実行委員会との共催で行ったこの催物は、上野公園エリアの各文化施設を会場として開催される「東京のオペラの森2008 NOMORI イベント・ウィーク」の一つでもあった。

チェコの画家ダグマル・ベルコヴァーの挿絵による「くるみ割りとねずみの王さま」の絵本を大スクリーンで紹介しながら、随所で、木管アンサンブルが「東京のオペラの森2008　チャイコフスキーとその時代」のテーマにちなみ、組曲「くるみ割り人形」から抜粋した曲の演

奏を行った。

○講演会「チェコの子どもと読書」

［2008年４月26日（土）：参加者106名］

子ども読書の日の行事及び「チェコへの扉－子どもの本の世界」展の関連行事として、チェコセンター所長で駐日チェコ共和国大使館一等書記官のペトル・ホリー氏による講演会を開催した。

10年前に来日し歌舞伎研究を行っている講師は、流暢な日本語でチェコ共和国についての基礎知識を述べたあと、画像を豊富に用いチェコ絵本の小史について講演した。

○講演会「チェコの児童書の歩みと研究の今」

［2008年７月12日（土）：参加者87名］

「チェコへの扉－子どもの本の世界」展の関連行事として、チェコ児童文学研究者でチェコ共和国マサリク大学教員のマルチン・ライスネル氏による講演会を開催した。

約100年の歴史をもつチェコ児童文学について、前半では出版界の出来事や流れを中心に話が進み、次いで有力な児童雑誌や児童文学批評誌の紹介の後、「黄金のリボン賞」などチェコにおける児童文学賞の説明があった。また、子どもの本の情報源として刊行物や関連機関ホームページを挙げたほか、個々の児童図書出版社の現状に言及した。チェコにおける民主化後の出版状況を俯瞰できる充実した内容であった。なお、講演はチェコ語で行われ、監修者である村上健太氏が通訳した。<口絵参照>

○講演会「松居直氏に聞く－絵雑誌・子ども・絵本」

［2008年９月27日（土）：参加者108名］

「童画の世界－絵雑誌とその画家たち」展の関連行事として、社団法人日本国際児童図書評議会会長の松居直氏によるインタビュー形式の講演を開催した。

子ども時代に「コドモノクニ」、「キンダーブック」などの絵雑誌を楽しんだ経験から、絵を「読む」子どもの力と読み聞かせの大切さ、その後携わることとなった編集の仕事へのつながりなど、子どもと本をつなぐ立場にある者はどうあるかを考えさせられる内容であった。

また、大人のための絵本についての質問や、次回の講演内容の要望などが講演後の質疑で出され、絵本に対する関心の大きさが感じられる講演であった。

○国際子ども図書館100万人来館記念式典

［2008年10月９日（木）］

2000年５月に開館して以来、国際子ども図書館の来館者が、100万人を数えた。これを記念し、100万人目の入場者に証明書と記念品を贈呈した。

記念すべき100万人目は、台東区の松瀬英理子さん（３歳）であった。「月に２～３回、利用しています。子どもは、多くの絵本から、毎回違う本を喜んで選び、読んでいます。大人も、静かに本を楽しめる図書館だと思います。これからも利用したいと思います」（お母さんのコメント）＜口絵参照＞

○講演会「戦中期『講談社の絵本』」

［2008年10月26日（日）：参加者83名］

「童画の世界－絵雑誌とその画家たち」展の関連行事として、立教大学名誉教授の吉田新一氏による講演会を開催した。

戦中期（昭和11年から昭和17年）に刊行された203冊のうち、講師の思い出に残るものも含めた昔話の絵本を中心に取り上げた。講師は、この時期の講談社の絵本を「日本的な素材を意図的に取り上げ、文学的にドラマチックなストーリーを積極的に絵本化する試みをしていた」と評価し、戦中期という時代背景を持ちながらも今の絵本よりもストーリーが豊かで楽しい絵本があったことを、画像を交えながら紹介した。

○研修「児童文学連続講座－『日本の昔話』」

［2008年11月10日（月）～11日（火）：修了者61名］

総合テーマを「日本の昔話」として、全国の公共図書館等において児童サービスを担当する職員と当館職員を対象とした児童文学連続講座を開催した。＜口絵及び本文16～17ページ参照＞

○第10回図書館総合展への参加

図書館界と図書館関連企業による最新情報の交換の場として行われている図書館総合展が11月26日（水）から11月28日（金）まで、横浜市のパシフィコ横浜展示ホールで開催された。９回目となった今年も東京本館と共に参加し、国際子ども図書館の広報を行うために、会場内でパンフレットの配布等を行った。

○ギャラリートーク

［2008年12月14日（日）、2009年２月１日（日）：参加者48名］

「童画の世界－絵雑誌とその画家たち」展の期間中、職員によるギャラリートークを実施した。

○音楽界「童謡たまてばこ－大正時代から唄い継がれている歌とともに」

［2009年１月18日（日）：参加者141名］

「童画の世界－絵雑誌とその画家たち」展の関連音楽会としてしゅうさえこさんの歌、内田ゆう子さんの伴奏で開催した。

大正後半期に絵雑誌等で発表された童謡を童画家の絵を背面スクリーンに投影しながら楽しんだ。また、絵雑誌に掲載された短い童話の紹介を行った。

３．児童サービス

○「子どものへや」「世界を知るへや」での子どもと本を結ぶ取り組み

＜小展示＞

以下の箇所で小展示を実施した。表紙を見せて本を展示することにより、多くの子どもたちが興味を持ち、手に取って楽しんでいた。

なお、2006年12月から、国際子ども図書館ホームページに小展示の内容リストを掲載し、同内容の印刷物を展示期間中配布している（「世界を知るへや：Ｂ」は必要に応じて配布）。

（当館ホームページ＞子どものへやから＞お知らせ＞今月の小展示を参照。）

＜子どものへや：Ａ＞

「ねずみのおはなし」（１月）
「ゆきのおはなし」（１月～２月）
「はるのほん」（３月～４月）
「とりのほん」（５月）
「雨の本」（６月）
「すいかのほん」（７月～８月）
「つきのほん」（９月）
「どんぐりの本」（10月）
「おもしろ美術館へようこそ」（11月～12月）
「牛の本」（12月～）

＜子どものへや：Ｂ＞

「本の音楽会！」（2007年12月～2008年１月）
「旅の本」（２月～３月）
「穴の本」（４月～６月）
「大海原へ！～船の本～」（７月～８月）
「大空へ！」（９月～11月）
「菌はすごい！～きのことその仲間の本～」（11月～）

＜世界を知るへや：Ａ＞
「児童文学の旅－アメリカの大自然」(2007年12月～2008年５月)
「石井桃子さんの本」(５月～８月)
「2006年度国際アンデルセン賞＆IBBY オナーリスト受賞図書展関連展示」
(８月～９月)
「学校図書館セット貸出し　北欧セット（小学校高学年向)」(10月～11月)
「いぬ」(11月～)
＜世界を知るへや：Ｂ＞
「ゆめいろのパレットⅢ展関連展示」(2007年９月～2008年１月)
「チェコへの扉－子どもの本の世界展関連展示」(１月～９月)
「日本の童画家」(９月～)

また、廊下に面した二つの小窓に、季節や行事に合わせて手作りした折り紙や人形などを本とともに飾り、子どもが親しみやすい雰囲気作りを心掛けた。

＜夏休み読書キャンペーン＞
子どもたちに本の魅力を伝えるための企画として「夏休み読書キャンペーン2008」を行った。本を読んで問題に答える形式で、設問のカードは初級編・中級編・上級編の三つに分けた。延べ1,200名もの子どもたちの参加があった。今年は３択問題のみでなく、中級編・上級編には記述式の問題も取り入れたため、高学年の子どもたちも満足できる内容となった。

○子どものための催物
＜子どものためのおはなし会＞
職員によるおはなし会を、毎週土曜日、日曜日の午後２時から（４歳から小学１年生対象）と午後３時から（小学２年生以上対象）実施した。2008年は合計184回実施し、延べ1,159名が参加した。
おはなし会では主にストーリーテリングと絵本の読み聞かせを行い、参加した子どもには紹介した本のタイトルなどを記したプログラムと、１回参加するごとにスタンプを押印する「おはなし会カード」を配布している。2008年には参加回数が延べ80回を超えた子どももいた。

＜ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会＞
３歳以下の子どもとその保護者１名を対象として、月に２度（第３土曜日とそれに続く日曜日の午前11時から）実施してきた「ちいさな子どものための絵本の時間」の名称を、会の内容をより正確に伝えるため、４月から「ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会」と変更した。また、会への参加者は年々増加してきている

が、部屋の狭隘のため、参加者の満足度及び安全確保の観点から９月から電話あるいは来館による事前申込制、各回15組での実施に変更した。

2008年は合計24回実施し、延べ290組627名が参加した。昨年と比較すると、参加者も約100組、200名増と好評であった。絵本とわらべうたを組み合わせ、その日の参加者の年齢や個性に合わせたプログラムで行っている。

＜子どものためのおたのしみ会＞

春休み、こどもの日、秋の読書週間には、普段のおはなし会の内容を拡大し、対象も４歳以上の１種類だけにして、大型絵本の読み聞かせ、パネルシアター、人形劇等を実施した。2008年は各日２回合計10回実施し、昨年より約70名多い延べ214名が参加した。これまで冬休みに行っていた会を利用者の多い秋に移行したことが参加者増の一因と考えられる。

＜科学あそび「光のふしぎ―みんなで楽しく万華鏡づくり」＞

７月26日(土)、27日(日)、各日２回計４回（各２コース）を、ホール及びワークルームにて実施した。講師は職員が担当した。４歳から参加可能な「かがみコース」と小学１年生から参加可能な「光コース」の２コースを設けて実施、両日合わせて延べ104名の参加があった。

「かがみコース」では、ビー玉や、ビーズ入りのケースを取り付けた万華鏡を作って楽しみ、「光コース」では偏光板や分光板を用いた万華鏡を作りながら、光の性質について考えたりした。

万華鏡やその作り方が掲載されている資料のほか、鏡や光の性質、偏光板・分光板のしくみについての資料を紹介した。資料リストを配布して、読書活動への道案内としたほか、今年は参考として制作品の作り方も配布した。

○子どもの見学

＜通常の見学（団体向け）＞

１月から12月までに、27件877名の見学を実施した。内訳としては、保育園、幼稚園４件202名、小学校６件368名、中学校８件46名、養護学校２件13名、インターナショナルスクールや日本語学級４件89名、そのほか３件159名である。

毎年見学のために来館している団体や１年間に複数回来館している団体もある。

内容は、館内見学（子ども向け当館紹介ビデオの視聴を含む）、おはなし会、調べ学習の援助などを希望により組み合わせて対応している。また、事前の申請がなく、学級・学年単位など大人数で訪れるケースについても、可能な範囲で対応をした（52ページの「10）国際子ども図書館見学統計」には計上していない）。

＜夏休み子ども向け図書館見学ツアー＞

昨年試行した、子ども向けの図書館見学ツアーが好評だったため、今年も夏休み期間中は通常の団体向け見学を休止して、個人で気軽に参加できる見学ツアーを実施した。対象は小学生以上で、内容は１時間程度の館内見学（子ども向け当館紹介ビデオの視聴を含む）に限定している。７月29日、８月５日、12日、19日、26日に６回実施し115名が参加した。１回あたりの参加人数を20名とし、10名を超えるグループでの参加は同日午前中に別枠を設けて対応したため、安全に実施することができた。見学終了後は子どものへやで行っていた読書キャンペーンへも誘導し、図書館の利用に効果的につなげることができた。

○学校図書館セット貸出し

学校図書館への支援を目的として、世界の国や地域に関する資料とその国の絵本や物語、原語の絵本などを、50冊前後のセットにして、学校図書館に１か月間貸し出すサービスである。申込みのあった学校図書館すべてに希望セットの解題をまとめた小冊子を送付するほか、全セットの解題をホームページ上で公開している。

2008年１月からは、新たに「ヨーロッパセット」（小学校低学年向及び小学校高学年向）を加えて全部で６種類のセットとなった。2008年に延べ269校に計12,721冊の資料を貸し出した。延べ利用校は前年比１割増であった。

2009年１月からの貸出開始に向けて、新たに「東アジアセット」、「東南アジア・南アジアセット」（両セットとも小学校高学年向及び中学校向）を構築した。

○その他

2007年８月１日以降、子どものへやで実施していた「どの本が好き？」アンケートは、2008年８月31日をもって約１年の調査を終了した。「また読んでみたいと思った本のタイトル」を子どもに記入してもらう調査票は合計で649枚を回収した。

夏休み中は、前述の読書キャンペーンで取り上げた資料名を記入する子どもが１割程度いた。また、前述の小展示で、表紙を見せていた本の記入が多かった。絵本が４割を占め、絵本以外の分野別では、読み物よりも、知識の本の方が多かった。全員が記入しているわけではないので、あくまでも目安ではあるが子どものへやの資料の利用傾向を知ることができた。

４．その他

○第６回国際子ども図書館連絡会議

［2008年６月18日（水）］

国際子ども図書館の平成19年度の活動について報告し、平成20年度の計画及び将来計画について国際子ども図書館と協力関係にある諸機関から意見聴取等を行うため、連絡会議を開催した。2008年の参加機関は、大阪府立国際児童文学館、国際交流基金情報センター、国際子ども図書館を考える全国連絡会、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金部、全国学校図書館協議会、東京子ども図書館、読書推進運動協議会、日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、日本図書館協会、ブックスタート、文字・活字文化推進機構、文部科学省生涯学習政策局社会教育課、同省初等中等教育局児童生徒課、同省スポーツ・青少年局青少年課、ユネスコ・アジア文化センターの17機関であった。

○児童サービス連絡会

［2008年10月15日（水）］

都道府県立図書館における児童サービスの現状と課題を把握し、情報共有を図るとともに、国際子ども図書館との連携・協力を強化することを目的に標記連絡会を開催した。メンバーは特色のあるサービスを行っている９機関（石川県立図書館、大阪府立中央図書館、岐阜県図書館、群馬県立図書館、東京都立多摩図書館、徳島県立図書館、福岡県立図書館、福島県立図書館、山口県立山口図書館）である。＜本文12～15ページを参照＞

５．刊行物

・展示会図録『チェコへの扉－子どもの本の世界』＊
・展示会「童画の世界－絵雑誌とその画家たち」小冊子＊
・『国際子ども図書館の窓』第８号＊＊
・『平成19年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「絵本の愉しみ（2）－アメリカ絵本の展開－」』＊＊
・利用案内：一般向け、子ども向け（日本語、英語、ハングル、中国語版）

＊…口絵参照。

＊＊…国際子ども図書館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/）にPDF版を掲載しています。

数字で見る！

国際子ども図書館

（1）国際子ども図書館所蔵統計（2008年９月30日現在）

資料区分						2008.９.30現在 所蔵数
資料情報課	図書（単位：冊）		日本語	児童書（＊1）		207,874
				児童書関連書、参考図書		15,004
			小計			222,878
			外国語	児童書（＊1）	欧米言語	43,041
					アジア言語	18,328
				児童書関連参考書		3,096
			小　計			64,465
	計					287,343
	逐次刊行物（単位：タイトル）	雑誌	日本語	児童雑誌		1,073
				児童関連誌		767
			外国語	児童雑誌	欧米言語	28
					アジア言語	30
				児童関連誌	欧米言語	87
					アジア言語	6
		小　計				1,991
		新聞	日本語			15
			外国語			1
	非図書資料（＊2）（単位：枚数及び物品数）	静止画、紙芝居（＊3）				16,519（1,415）
		カード、カルタ（＊3）				9,661　（159）
		マイクロフィルム				902
		マイクロフィッシュ				35,924
		音楽資料（レコード、CD、カセットテープ）（＊4）				1,728
		映像資料（ビデオテープ、ビデオディスク）				4,465
		電子資料（光ディスク、磁気ディスク）				2,434
児童サービス課（＊5）	図書（単位：冊）		日本語			18,007
			外国語			2,341
			小　計			20,348
	逐次刊行物（単位：タイトル）					20
	非図書資料（単位：点）					280

※2006年から国立国会図書館の基本統計に基づいた集計方法に変更。
付随して、集計時期を９月30日現在に変更した。

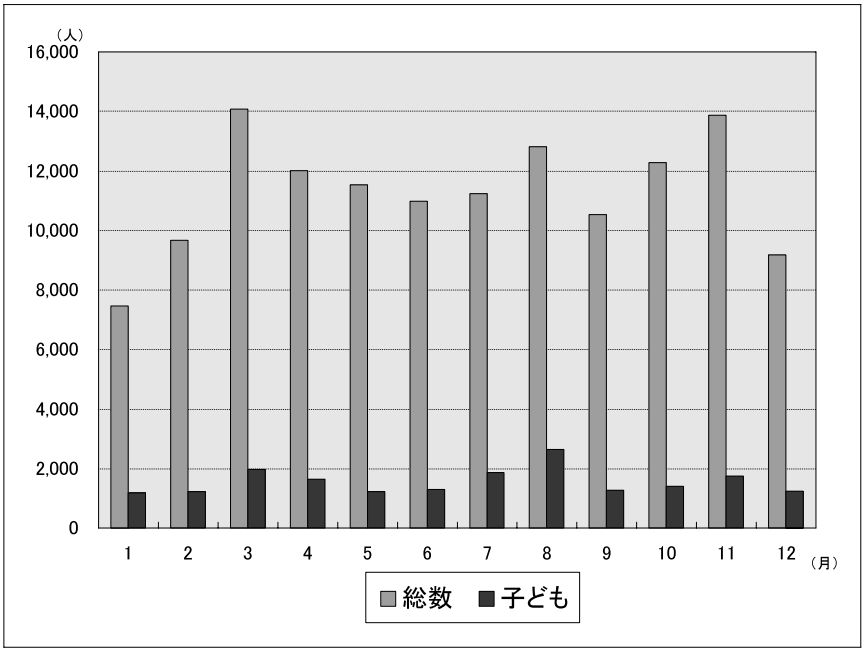
＊1　学校教科書、教師用教科書、学習参考書、楽譜、組み合わせ資料を含む
＊2　教師用指導書、児童書関連書のうち非図書形態のものの数を含む
＊3　括弧内はタイトル数
＊4　教師用指導書のみ（児童書音楽資料は未所蔵）
＊5　児童サービス課分には、学校図書館セット貸出し用資料を含む

（２）国際子ども図書館利用統計（2008年１月５日～12月27日）

１）－ａ　来館者統計・2000年５月６日～2008年12月27日までの総入館者数：1,031,811人

	合　計			曜　日　別　内　訳								
				月～金			土			日		
	日数	人　数		日数	人数	平均	日数	人数	平均	日数	人数	平均
		総数	子ども									
１月	22	7,469	1,178	14	3,363	240	4	1,778	445	4	2,328	582
２月	24	9,669	1,215	16	5,155	322	4	2,226	557	4	2,288	572
３月	24	14,076	1,973	14	6,073	434	5	4,020	804	5	3,983	797
４月	24	12,005	1,634	16	6,659	416	4	2,605	651	4	2,741	685
５月	24	11,536	1,219	17	7,301	429	4	2,251	563	3	1,984	661
６月	24	10,973	1,290	15	5,042	336	4	2,587	647	5	3,344	669
７月	26	11,228	1,861	18	6,100	339	4	2,451	613	4	2,677	669
８月	26	12,812	2,640	16	7,603	475	5	2,276	455	5	2,933	587
９月	23	10,536	1,261	15	4,848	323	4	2,695	674	4	2,993	748
10月	26	12,282	1,403	18	6,778	377	4	2,499	625	4	3,005	751
11月	24	13,863	1,740	15	7,128	475	5	3,684	737	4	3,051	763
12月	21	9,174	1,233	14	5,046	360	4	2,285	571	3	1,843	614
合計	288	135,623	18,647	188	71,096	378	51	31,357	615	49	33,170	677

１）－ｂ　来館者統計（グラフ）



2）「資料室」利用統計

	利用状況			資料室別			
				第一資料室		第二資料室	
	開室日数	人数	平均	人数	平均	人数	平均
1月	18	915	51	615	34	300	17
2月	20	1,005	50	637	32	368	18
3月	19	1,124	59	636	33	488	26
4月	20	826	41	543	27	283	14
5月	21	1,374	65	863	41	511	24
6月	19	963	51	601	32	362	19
7月	22	1,217	55	749	34	468	21
8月	21	1,342	64	858	41	484	23
9月	19	1,183	62	747	39	436	23
10月	22	1,215	55	779	35	436	20
11月	20	1,338	67	861	43	477	25
12月	18	1,056	59	650	36	406	23
合計	239	13,558	57	8,539	36	5,019	21

＊11/18は第2資料室は休室

3）本のミュージアムの統計は「活動報告」を参照のこと。

4）「子どものへや」利用統計

	利用状況						
	開館日数	人数	平均	大人		子ども	
				人数	平均	人数	平均
1月	22	3,889	177	2,864	130	1,025	47
2月	24	4,654	194	3,559	148	1,095	46
3月	24	6,805	284	5,223	218	1,582	66
4月	24	5,208	217	3,774	157	1,434	60
5月	24	5,570	232	4,431	185	1,139	47
6月	24	5,603	233	4,480	187	1,123	47
7月	26	5,754	221	4,199	162	1,555	60
8月	26	6,942	267	4,701	181	2,241	86
9月	23	5,463	238	4,226	184	1,237	54
10月	26	5,673	218	4,404	169	1,269	49
11月	24	6,666	278	5,073	211	1,593	66
12月	21	4,136	197	2,980	142	1,156	55
合計	288	66,363	230	49,914	173	16,449	57

5）「メディアふれあいコナー」利用統計

	利用状況		
	開室日数	人数	平均
1月	22	2,766	126
2月	24	4,120	172
3月	24	5,735	239
4月	24	4,525	189
5月	24	4,519	188
6月	24	4,422	184
7月	26	4,478	172
8月	26	6,544	252
9月	23	5,129	223
10月	26	4,754	183
11月	23	5,845	254
12月	21	3,913	186
合計	287	56,750	198

※1/27、4/26、7/12、9/27、10/27は午後休室
※3/23は15時まで休室
※11/11は全日休室

6）複写サービス利用統計

	来館複写		遠隔複写		計	
	件	枚	件	枚	件	枚
1月	457	2,922	832	1,214	1,289	4,136
2月	587	3,317	390	558	977	3,875
3月	399	2,824	123	346	522	3,170
4月	378	1,901	43	692	421	2,593
5月	555	3,101	129	770	684	3,871
6月	510	3,665	38	308	548	3,973
7月	529	3,065	83	721	612	3,786
8月	790	5,033	78	871	868	5,904
9月	706	3,908	114	627	820	4,535
10月	763	6,429	142	660	905	7,089
11月	840	4,121	121	470	961	4,591
12月	660	5,135	207	689	867	5,824
合計	7,174	45,421	2,300	7,926	9,474	53,347

＊遠隔複写には OPAC 経由申込みを含む

7）資料出納統計

	出納 （第一＋第二資料室）	
	件	冊
1月	950	2,422
2月	1,155	2,886
3月	1,107	2,676
4月	990	2,287
5月	1,562	3,138
6月	1,257	3,154
7月	1,293	3,160
8月	1,654	3,490
9月	1,308	3,127
10月	1,869	3,932
11月	1,684	4,130
12月	1,554	3,366
合計	16,383	37,768

8）レファレンス統計

資料情報課

	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	小計
情報源･文献紹介	文　書	6	4	7	7	10	12	2	6	6	7	6	14	87
	電　話	0	8	1	3	4	3	2	3	5	8	1	5	43
	口　頭	11	26	8	15	25	9	20	24	30	32	25	16	241
簡易な事実調査	文　書	3	3	2	3	7	11	1	1	4	2	3	7	47
	電　話	1	5	4	3	3	7	1	8	4	4	5	3	48
	口　頭	2	5	9	5	11	2	6	7	5	4	5	6	67
書誌的事項調査	文　書	8	10	7	6	8	3	2	7	8	7	10	13	89
	電　話	3	7	5	0	2	7	4	4	0	5	5	2	44
	口　頭	5	4	3	3	7	3	7	5	7	4	6	6	60
所蔵調査	文　書	1	0	2	1	6	2	0	0	1	1	3	3	20
	電　話	23	24	36	16	15	11	14	22	14	13	22	17	227
	口　頭	25	45	30	48	44	16	29	21	26	44	34	23	385
所蔵機関調査	文　書	1	1	2	2	6	2	2	0	3	2	2	7	30
	電　話	2	2	3	3	3	2	3	2	2	1	3	1	27
	口　頭	6	7	5	2	6	3	4	3	5	6	8	4	59
類縁機関案内	文　書	0	0	0	1	2	1	0	0	2	0	0	1	7
	電　話	1	2	5	4	0	1	2	4	3	2	2	4	30
	口　頭	5	4	9	4	10	5	8	3	3	6	9	5	71
利用案内･その他 (*)	文　書	5	3	2	1	2	3	4	0	4	0	1	3	28
	電　話	34	35	32	20	21	21	25	24	17	16	20	23	288
	口　頭	149	146	164	127	193	134	166	146	146	173	133	159	1,836
小　計	文　書	24	21	22	21	41	34	11	14	28	19	25	48	308
	電　話	64	83	86	49	48	52	51	67	45	49	58	55	707
	口　頭	203	237	228	204	296	172	240	209	222	269	220	219	2,719
総　計		291	341	336	274	385	258	302	290	295	337	303	322	3,734

児童サービス課

	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	小計
情報源・文献紹介	文　書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	電　話	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	4
	口　頭	13	11	9	14	6	10	12	23	19	12	22	12	163
簡易な事実調査	文　書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	電　話	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	口　頭	0	3	5	1	4	5	8	2	2	3	1	3	37
書誌的事項調査	文　書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	電　話	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	口　頭	0	9	0	0	3	3	2	0	1	0	0	0	18
所蔵調査	文　書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	電　話	1	0	0	1	0	0	1	1	0	1	1	0	6
	口　頭	41	41	46	59	51	40	52	63	30	36	52	32	543
所蔵機関調査	文　書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	電　話	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
	口　頭	8	13	2	10	5	3	13	26	1	5	6	3	95
類縁機関案内	文　書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	電　話	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
	口　頭	0	1	1	0	2	1	0	1	0	0	2	1	9
利用案内・その他（＊）	文　書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	電　話	1	1	0	0	0	0	11	2	0	2	1	2	20
	口　頭	155	230	216	195	203	208	171	218	167	171	223	159	2,316
小　計	文　書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	電　話	3	2	0	1	0	0	12	10	0	3	2	2	35
	口　頭	217	308	279	279	274	270	258	333	220	227	306	210	3,181
総　計		220	310	279	280	274	270	270	343	220	230	308	212	3,216

＊「利用案内・その他」の口頭には「機器操作支援」、「検索援助」を含む

9）資料貸出統計

	国会・行政支部図	図書館間貸出	展示会貸出・その他	合計
	冊	冊	冊	冊
1月	1	31	237	269
2月	0	27	0	27
3月	0	25	0	25
4月	0	35	2	37
5月	6	36	0	42
6月	0	35	0	35
7月	0	37	0	37
8月	1	15	0	16
9月	0	37	195	232
10月	6	38	5	49
11月	1	48	2	51
12月	0	50	99	149
合計	15	414	540	969

＊図書館間貸出には OPAC 経由申込みを含む

10）国際子ども図書館見学統計

	企画協力課		児童サービス課		合　計	
	件数（件）	人数（人）	件数（件）	人数（人）	件数（件）	人数（人）
1月	16	101	3	120	19	221
2月	19	183	0	0	19	183
3月	15	163	2	43	17	206
4月	13	109	2	6	15	115
5月	17	100	2	11	19	111
6月	17	127	1	16	18	143
7月	15	86	2	24	17	110
8月	19	225	7	225	26	450
9月	13	106	2	54	15	160
10月	20	135	4	113	24	248
11月	19	221	3	9	22	230
12月	15	111	5	371	20	482
合計	198	1,667	33	992	231	2,659

11）国際子ども図書館ホームページアクセス統計

	訪問者数	ページ参照数
1月	54,832	183,100
2月	49,693	208,605
3月	49,648	179,777
4月	50,905	171,864
5月	64,140	285,575
6月	63,731	234,933
7月	51,575	164,808
8月	60,986	209,297
9月	58,980	189,669
10月	59,790	193,268
11月	55,951	222,273
12月	51,793	164,296
合計	672,024	2,407,465

これから…

国際子ども図書館の今後の予定をご紹介します。

＜2009年＞

3月14日～7月5日
展示会「ゆめいろのパレットⅣ－野間国際絵本原画コンクール入賞作品　アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」

3月28・29日
子どものための春休みおたのしみ会

4月25日　「ゆめいろのパレットⅣ」関連講演会
（※「子ども読書の日」（4月23日）の行事を兼ねる。）

5月5日　子どものためのこどもの日おたのしみ会

7月18日～2010年2月7日（予定）
展示会「のりもの展」（仮題）

7月25・26日
夏休み子ども向け催物（科学あそび）

10月31日・11月1日
子どものための秋のおたのしみ会

11月9・10日（予定）
児童文学連続講座

＜2010年＞

2月20日～未定（予定）
展示会「開館10周年記念展示会」（仮題）

3月1日　『国際子ども図書館の窓』第10号刊行

3月27・28日
子どものための春休みおたのしみ会

また、年間を通して様々な行事を企画します。詳しくは当館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/）をご覧いただくか、下記へお問い合わせください。
国立国会図書館国際子ども図書館　　電話　03（3827）2053（代表）

国際子ども図書館利用案内

ホームページ　http://www.kodomo.go.jp/
電話　03（3827）2053（代表）　03（3827）2069（録音による利用案内）

☆来館利用　問い合わせ先：企画協力課　ホームページ ＞ ご利用の案内
どなたでも利用できます（ただし、第一資料室・第二資料室は満18歳以上の方）。

開館時間　9：30～17：00　資料請求　9：30～16：30（於第一資料室・第二資料室）
休館日　月曜日、国民の祝日・休日（こどもの日は開館）、年末年始（12月28日～１月４日）、毎月第３水曜日（資料整理休館日）
休室日　休館日のほか、以下の日が休室日となります。
２階第一資料室・第二資料室：日曜日
３階本のミュージアム：展示会準備等のための休室日
所蔵資料　国内で出版された児童図書、児童雑誌、外国語の児童書、児童書関連図書・雑誌等　※資料の利用は館内のみ。館外への帯出はできません。

☆レファレンス・資料案内　問い合わせ先：資料情報課情報サービス係
ホームページ ＞ 資料情報サービス ＞ レファレンス・コーナー
児童書・児童文学、児童図書館活動等に関するお問い合わせにお答えします。
◆申込方法：来館、文書、電話
※資料を直接確認しなければならないなどの時間を要する調査、および聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスは文書でお願いします。

☆資料の複写（有料）　問い合わせ先：資料情報課情報サービス係
ホームページ ＞ 資料情報サービス ＞ 利用案内 ＞ 来館してのご利用
ホームページ ＞ 資料情報サービス ＞ 利用案内 ＞ ご自宅やお近くの図書館からのご利用
◆申込方法：来館、NDL-OPAC 経由、郵送

☆資料の図書館間貸出し　問い合わせ先：資料情報課情報サービス係
ホームページ ＞ 資料情報サービス ＞ 利用案内 ＞ ご自宅やお近くの図書館からのご利用
「図書館間貸出制度」に加入している図書館のみが対象となります。
※雑誌や1950年以前刊行の図書など貸し出しできない資料もあります。

☆見学・ツアー　問い合わせ先：企画協力課企画広報係、児童サービス課児童サービス係
＜大人向け＞　ホームページ ＞ ご利用の案内 ＞ 見学・ツアー
としょかんコース（毎週火曜日）、たてものコース（毎週木曜日）ほか
＜子ども向け＞　ホームページ ＞ 子どものへやから ＞ 子ども向け見学のご案内

☆学校図書館セット貸出し　問い合わせ先：児童サービス課企画推進係
ホームページ ＞ 学校図書館へのサービス ＞ 学校図書館セット貸出し
テーマごとに50冊前後で構成する資料のセットを学校図書館に貸し出します。
※セットに含まれる資料の解題をホームページでご覧いただけます。

国際子ども図書館の窓　　第９号　2009.3

発行所　国立国会図書館　**国際子ども図書館**　2009年３月１日発行
編集責任者　齋藤　友紀子
〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電　話　03（3827）2053（代表）　ＦＡＸ　03（3827）2043
E-mail　info@kodomo.go.jp　ホームページ http://www.kodomo.go.jp/
印刷所　株式会社 山越

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。

The Window
the journal of the International Library of Children's Literature
No. 009 March 2009

Contents

【Frontispiece】
【Foreword】 ····· Yukiko Saito ····· 1
【Highlights of 2008】
Exhibition "Door to the Czech Republic : The world of children's books" ····· Exhibition team ····· 3
On the Exhibition "Door to the Czech Republic" ····· Kenta Murakami ····· 5
Exhibition "Hans Christian Andersen Award 2006 & IBBY Honour List 2006" ····· Exhibition team ····· 8
Exhibition "World of Illustrations for Children : Picture Magazines and Their Artists" ····· Exhibition team ····· 9
Conference on library services for children FY2008 : realities and problems of support for school libraries ····· Children's Services Division ····· 12
Report on the ILCL Lecture Series on Children's Literature —Japanese folk tales— ····· Planning and Cooperation Division ····· 16
New addition to Picture Book Gallery—"The American Picture Book : Prologue to the Golden Years"
"Information about Children and Books in Japan" on the web ····· Planning and Cooperation Division ····· 18
【International exchange】
People working for child readers—visit to International Youth Library & the 31st IBBY World Congress····· Satoko Konuma ····· 19
Visit to Canada : Reading promotion activities for children and their host organizations ····· Yumi Mitobe ····· 22
Visitors from abroad ····· Reina Nakano ····· 25
【Research reports】
Iranian children's literature ····· Keiko Aiko ····· 26
Latin-American children's literature (Spanish-speaking communities) ····· Machi Godo ····· 31
The places noted the writers of children's stories ····· Takeo Miyakawa ····· 36
【ILCL activity report】 ····· 38
【ILCL in figures】 ····· 47
【Schedule】 ····· 53
【ILCL user guide】 ····· 54

NATIONAL DIET LIBRARY
Tokyo